

宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報

(V)

1985

宮崎県教育委員会

**宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報**

(V)

1985

宮崎県教育委員会



今江城（仮称）

序

宮崎県教育委員会では、地域振興整備公団の委託を受けて、昭和55年度から宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

本書は、昭和59年度末に調査いたしました今江城（仮称）と昭和60年度に調査いたしました前原北遺跡の概要報告であります。

熊野の地は、『延喜式』などの記録にその名がみられ、日向においても古来より重要な地であったことは想像に難くありません。

今回の調査では、それに関連した山城や建物跡などを明らかにすることができました。さらには、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡群も検出され、同時代の熊野原遺跡や堂地東遺跡など併せて、この時代の集落の変遷や生活様式の変化を解明するうえで貴重な資料になることと存じます。

なお、発掘調査にあたって深い御理解と御協力を賜った地域振興整備公団や調査指導の先生方に対して衷心から御礼を申し上げます。

昭和61年3月

宮崎県教育委員会

教 育 長 船 木 哲

例 言

1. 本書は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて、県教育委員会が実施した宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡群の昭和60年度の発掘調査概要報告書であるが、昭和59年度は概報を刊行しなかったため、山城調査についてをあわせて報告する。
2. 各遺跡の調査期間、調査担当者は次の通りである。

今江城跡（仮称）	昭和59年10月9日～昭和60年3月20日
	調査担当者 谷口武範
前原北遺跡（20号地）	昭和60年4月3日～昭和61年1月31日
	調査担当者 北郷泰道・谷口武範
3. 本書の執筆、及び編集には北郷と谷口が当たった。また、文責については、文末に明記している。

本文目次

前原北遺跡

I 遺跡の位置と環境	3
II 調査の経緯と経過	3
III 調査の概要	3
IV まとめ	18

今江城跡（仮称）

I 位置と環境	21
II 遺構・遺物の概要	21
III まとめ	34

插图目次

第1図 学園都市遺跡群位置図	
第2図 前原北遺跡遺構分布図	1~2
第3図 S A14竪穴住居跡実測図	4
第4図 S A14出土土器実測図	5
第5図 S A32竪穴住居跡実測図	6
第6図 S A32出土土器実測図	7
第7図 S A5・6竪穴住居跡実測図	8
第8図 S A6出土土器実測図	9
第9図 S A5出土土器実測図	10
第10図 S C12貯蔵穴実測図	10

第11図	S A 10・S A 10—1 竪穴住居跡実測図	11
第12図	S A 10・S A 10—S C 1 出土土器実測図	12
第13図	S A 16竪穴住居跡実測図	13
第14図	S A 16出土土器実測図	14
第15図	S A 28竪穴住居跡実測図	15
第16図	S A 28出土土器実測図	15
第17図	S A 15竪穴住居跡実測図	16
第18図	S A 15出土土器実測図	17
第19図	前原北遺跡出土刻目突帯文土器実測図	18
第20図	周辺遺跡位置図	22
第21図	今江城遺構配置図	23~24
第22図	第7トレンチ西壁土層断面図	26
第23図	第3トレンチ東壁土層断面図	27~28
第24図	第1曲輪出土遺物実測図	31
第25図	第2曲輪遺構配置図	32
第26図	第9トレンチ東壁土層断面図	33
第27図	第2曲輪出土遺物実測図	35
第28図	第6トレンチ南壁土層断面図	36

図 版 目 次

口絵カラー 今江城（仮称）

図版1 今江城（仮称）・前原北遺跡

図版2 上, S A 5・6 検出状況（北西から） 下, S A 50 検出状況（西から）

図版3 上, 東端区の状態（西から） 下, S A 10・S A 10—1 検出状況（南東から）

図版4 上, S A 10 検出状況（東から） 下, S A 22 検出状況（北から）

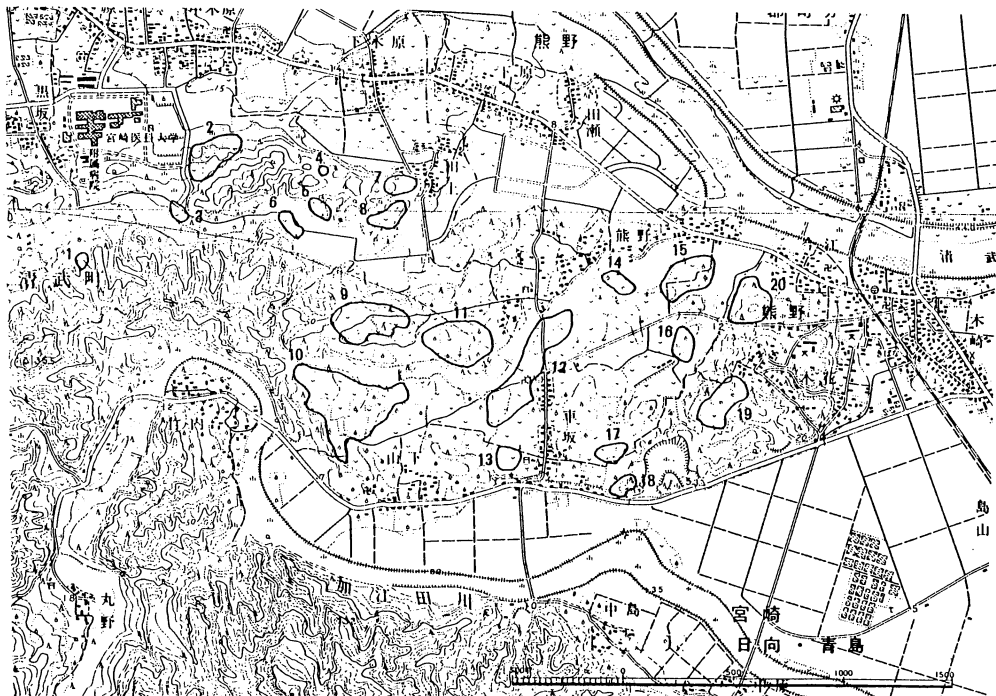
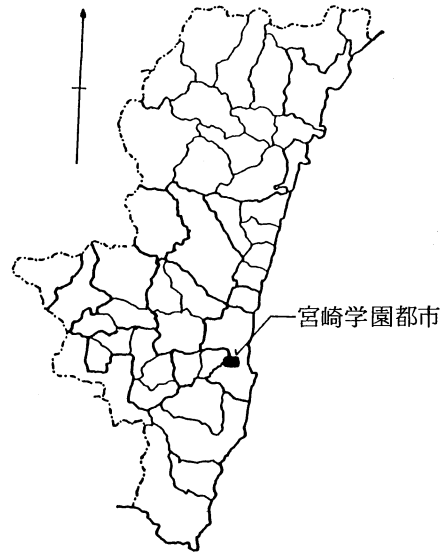
図版5 上, S A 4・S A 4—1 検出状況（東から） 下, S A 36 検出状況

- 図版6 上, SA49遺物出土状況 下, 高坏出土状態
- 図版7 上, SC12検出状況 下, SC16検出状況
- 図版8 上, SC13検出状況 下, SC13遺物出土状態
- 図版9 上, SA30—SC1遺物出土状態 下, SA30—SC1貝殻出土状態
- 図版10 上, 西区掘立柱建物跡検出状況(1) 下, 西区掘立柱建物跡検出状況(2)
- 図版11 前原北遺跡出土遺物(1)
- 図版12 前原北遺跡出土遺物(2)
- 図版13 前原北遺跡出土遺物(3)
- 図版14 上, 今江城(仮称)北から 下, 今江城(仮称)遠景北西から
- 図版15 上, 第1曲輪、第3トレンチ東壁土層断面図 下, 井戸検出状況
- 図版16 上, 5号・6号土壇検出状況 下, 7号土壇検出状況
- 図版17 上, 9号土壇検出状況 下, 9号土壇遺物出土状況
- 図版18 上, 第2曲輪、作業風景(南より) 下, 第4トレンチ北壁土層断面
- 図版19 上, 遺物出土状態(1) 下, 遺物出土状態(2)
- 図版20 上, 集石検出状況 下, 第1曲輪、南側下方の平坦面
- 図版21 上, 第6トレンチ南壁土層断面
- 図版22 今江城(仮称)出土遺物

表 目 次

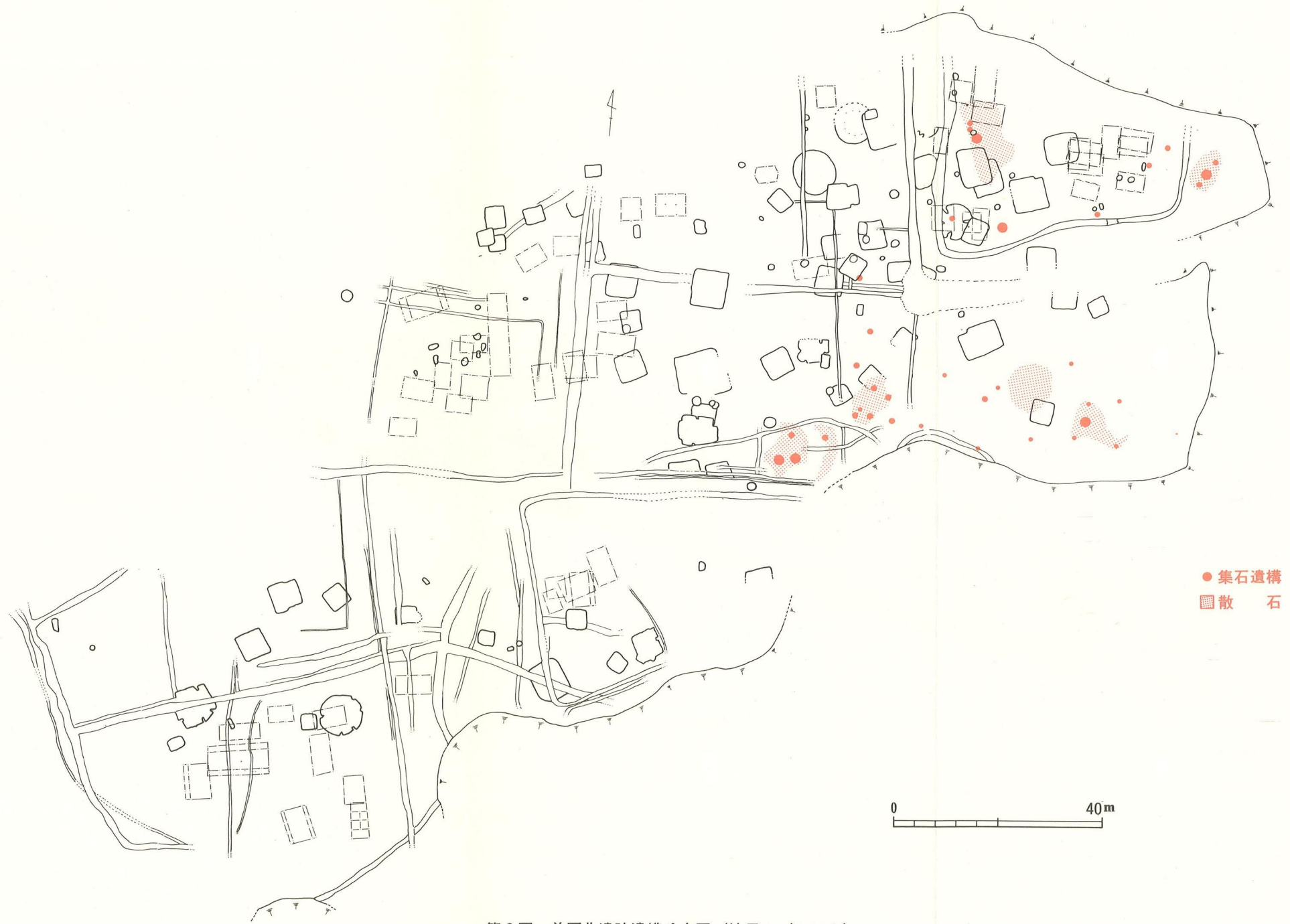
表1 SA14土器観察表 …………… 5	表6 SA16土器観察表 …………… 14
表2 SA32土器観察表 …………… 7	表7 SA28土器観察表 …………… 16
表3 SA6土器観察表 …………… 9	表8 SA15土器観察表 …………… 17
表4 SA5土器観察表 …………… 10	表9 土師器観察表(1) …………… 30
表5 SA10土器観察表 …………… 12	表10 土師器観察表(2) …………… 34

- 1 山内石塔群 (23号地)
- 2 下田畑遺跡 (1号地)
- 3 赤坂遺跡 (7号地)
- 4 小山尻西石塔群 (8号地)
- 5 浦田遺跡 (4号地)
- 6 入料遺跡 (5号地)
- 7 小山尻東遺跡 (2号地)
- 8 田上遺跡 (3号地)
- 9 堂地西遺跡 (9号地)
- 10 平畑遺跡 (10号地)
- 11 堂地東遺跡 (11号地)
- 12 熊野原遺跡 (14号地)
- 13 犬馬場遺跡 (13号地)
- 14 前原西遺跡 (15・16号地)
- 15 前原北遺跡 (20号地)
- 16 前原南遺跡 (19号地)
- 17 陣ノ内遺跡 (18号地)
- 18 車坂城跡
- 19 木花遺跡 (21号地)
- 20 今江城 (仮称) 跡



第1図 学園都市遺跡群位置図

前 原 北 遺 跡



第2図 前原北遺跡遺構分布図（縮尺1／1,000）

I、遺跡の位置と環境

前原北遺跡は、宮崎市から清武町にまたがる宮崎学園都市建設予定地の東端、宮崎市大字熊野に位置する。舌状に東に突き出した標高11~13mの台地形を占地し、西側が平坦に削平されることによって本来の遺跡を構成する広がりを確認し難いもの、おおよそ30,000㎡に及び遺構の分布が確認され、そのすべてを完掘することが出来た。なお、西側の削平面はほぼ平坦なレベルでシラス層にまで及ぶもので、かなり急な山地形であったと考えられ、集落跡としては完結した範囲を発掘し得たと理解してよいと思う。

II、調査の経緯と経過

前原北遺跡は、昭和56年度にそのうちの5,000㎡が20号地遺跡として調査されている⁽¹⁾。さらに、同年の試掘調査における確認によっても一大住居跡群であることが知られていた。しかし、開発の進展に伴いタバコ作付けを本調査までの間余儀なくされ、ある所においてはたとえ20cm遺存した遺構が半分の10cmに削平されているなど耕作による遺跡破壊が進み、あらためて耕作と遺構の保全に問題を残した。

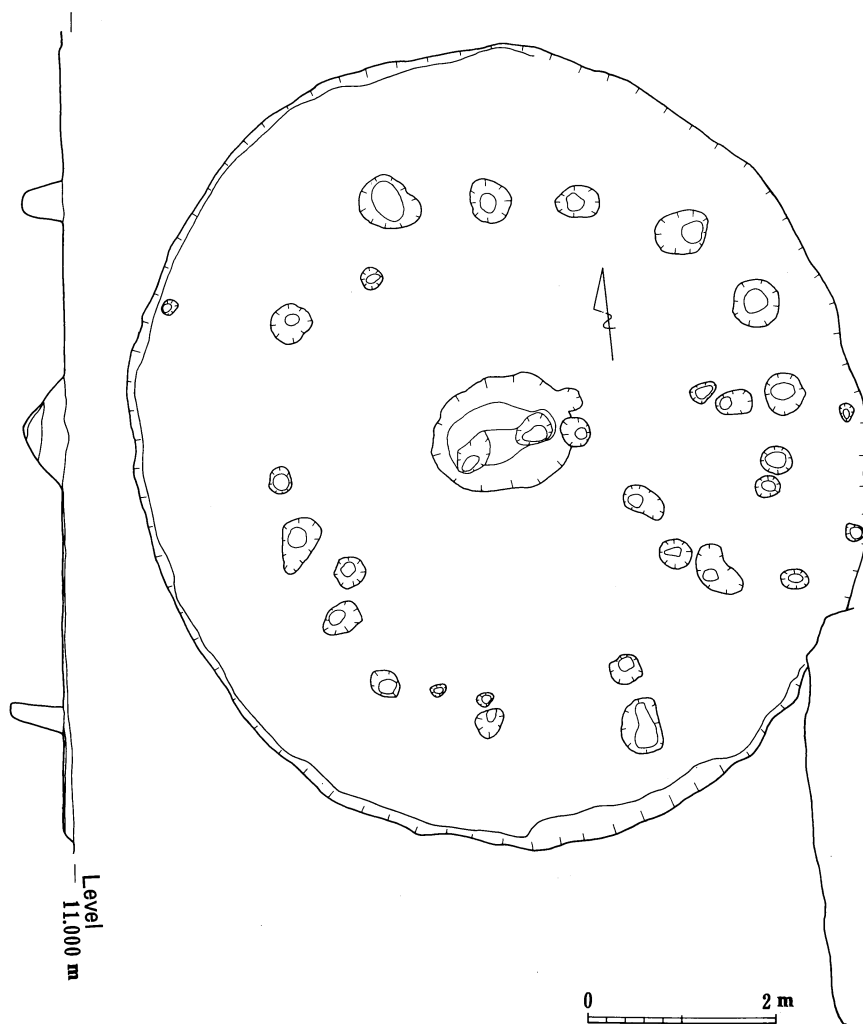
発掘調査には4月3日から着手し、まず重機で耕土を除去し、その後遺構検出にとりかかった。すでにアカホヤ層下に集石遺構が存在する事が知られていたため、アカホヤ層上に遺構の確認されなかった場所は集石遺構の検出に心がけた。また調査の過程では掘立柱建物跡の復元を行い、遺跡説明会を開催した。

III、調査の概要

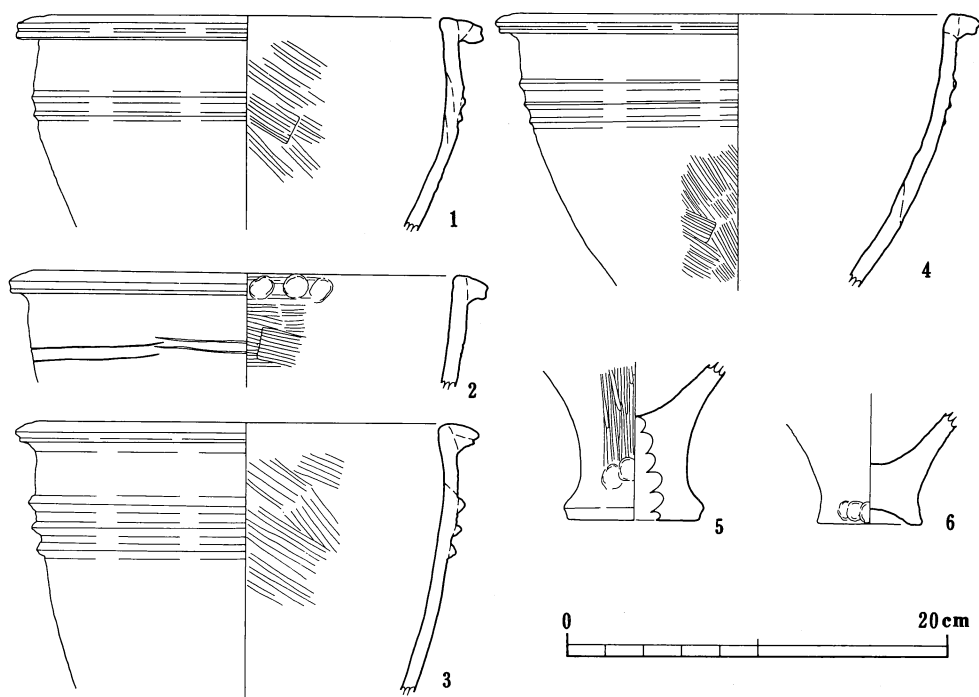
検出された遺構と遺物は多種にわたる。縄文早期の集石遺構と早期土器群、縄文晩期系土器、弥生時代の各期の竪穴住居跡と貯蔵穴、それに伴う弥生土器群、古墳時代の竪穴住居跡と土師器、須恵器、さらに掘立柱建物跡と陶磁器、そして近世墓などである。

縄文時代

36基の集石遺構と約1,000㎡におよぶ散石が認められた(第2図)。集石遺構は主に遺跡の東端に集中しており、その中でも台地形の縁辺よりにおおむね分布し、散石はそれらの内側に広がる傾向をみせる。そうした石のほとんどは、肉眼観察においては加火されている⁽²⁾。その中で注目を引いたのは、南辺より検出された東西に並ぶ4基の集石遺構で、それぞれに集石の形状に差が認められる。それらは連続して形成されたものと見ることも出来るし、



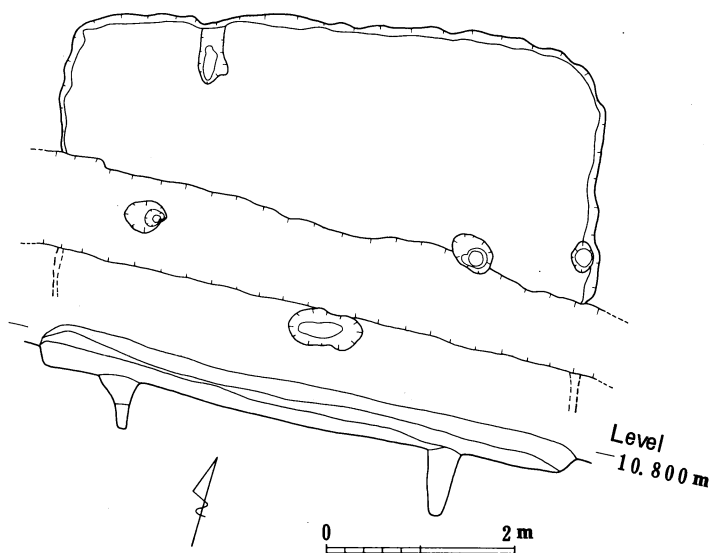
第3図 SA14豎穴住居跡実測図（縮尺1/40）



第4図 SA14出土土器実測図（縮尺1/4）

表1 SA14土器観察表

図面 番号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第4図	SA14	1	甕	ハケ目の ちナデ	粗いハケ目	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/4	浅黄橙 7.5 YR 8/4	1mm大の砂粒を 含む	スス付着
"	"	2	甕	ナデ	粗いハケ目	良好	にぶい橙 5 YR 7/4	にぶい橙 7.5 YR 7/3	1~2mmの砂粒 を含む	沈線文
"	"	3	甕	ナデ	粗いハケ目	良好	橙 5 YR 7/6	橙 5 YR 7/6	1mm大の砂粒を 含む	
"	"	4	甕	ナデ、ハケ目 のちナデ		良好	橙 5 YR 7/6	にぶい橙 7.5 YR 7/4	1mm大の砂粒を 含む	
"	"	5	甕・ 底部	へら磨き、 ナデ	ナデ	良好	にぶい橙 7.5 YR 7/4	にぶい橙 7.5 YR 7/4	1mm大の砂粒を 含む	
"	"	6	甕・ 底部	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙 5 YR 7/4	にぶい橙 7.5 YR 7/3	1mm大の砂粒を 含む	



第5図 SA32 堅穴住居跡実測図 (縮尺 1/40)

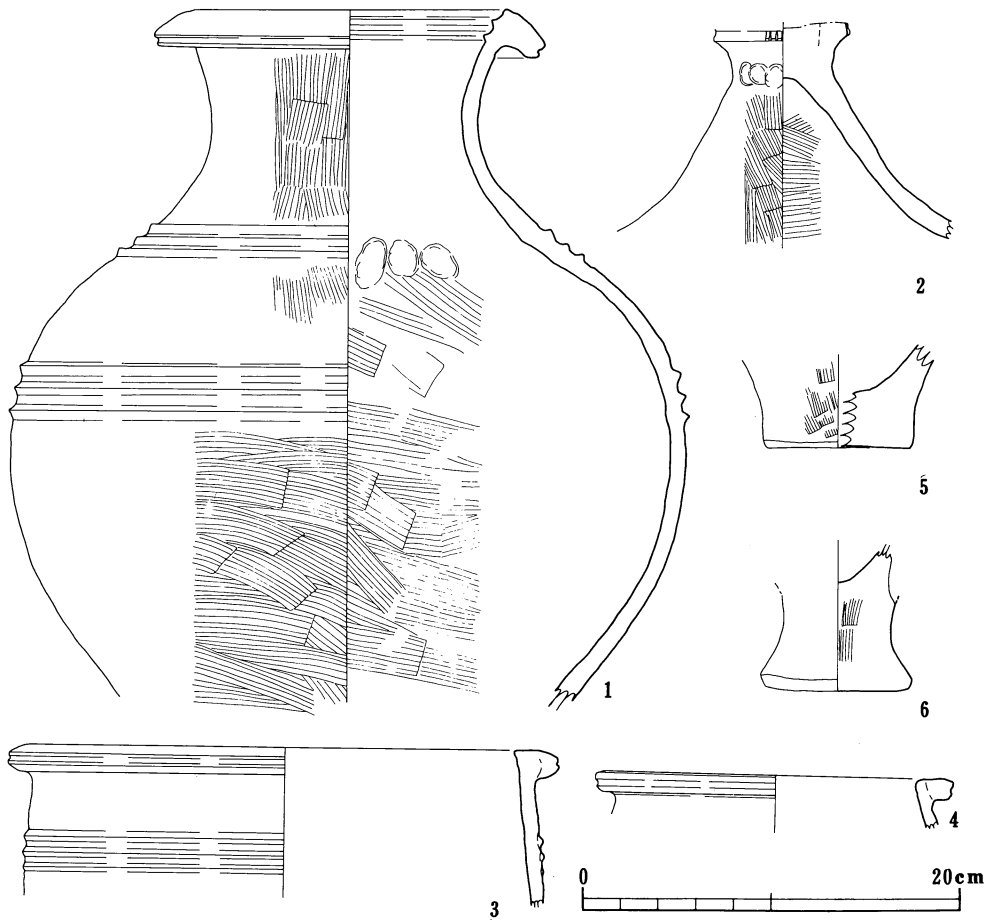
機能問題についてはしばらく保留しておくとしても、集石の形成そして廃絶の過程の各段階を示すもののようにも見る事が出来る。

一方、検出された縄文土器は極めて少量であるが、押型文・塞ノ神式・前平式・吉田式土器などがある。また、石器類もそれほど多くないが打製石鏃に頁岩製の尖頭器などがある。

弥生時代

検出された堅穴住居跡は、遺構の輪郭の不明なものも含め、76基を数えている。まだ詳細な遺物の検討が済んでいないため、弥生時代の堅穴住居跡と古墳時代の堅穴住居跡との実数は明らかにし難い。弥生時代の住居跡での確実な上限は、中期までであるが、遺物としては夜臼式系の土器片(第19図)が確認されており、学園都市遺跡群全体のなかでの弥生文化の成立について極めて重要かつ示唆的なものである。

SA13・SA14(第3図)は直径8m前後の円形住居跡で、学園都市遺跡群の弥生住居跡のなかでは、最も古く遡らせる事ができるものである。また、県内では新富町新田原遺跡⁽³⁾で検出された住居跡と共に、典型を示す円形住居跡に数えることができる。住居のほぼ中心に長径1.5mの掘り込みがあり、さらにその中に2本の支柱穴があり、壁寄りに8本の柱穴が巡る。出土する弥生土器は、口縁帯に突帯を張り巡らすもので、胴部への施文は沈線文ある



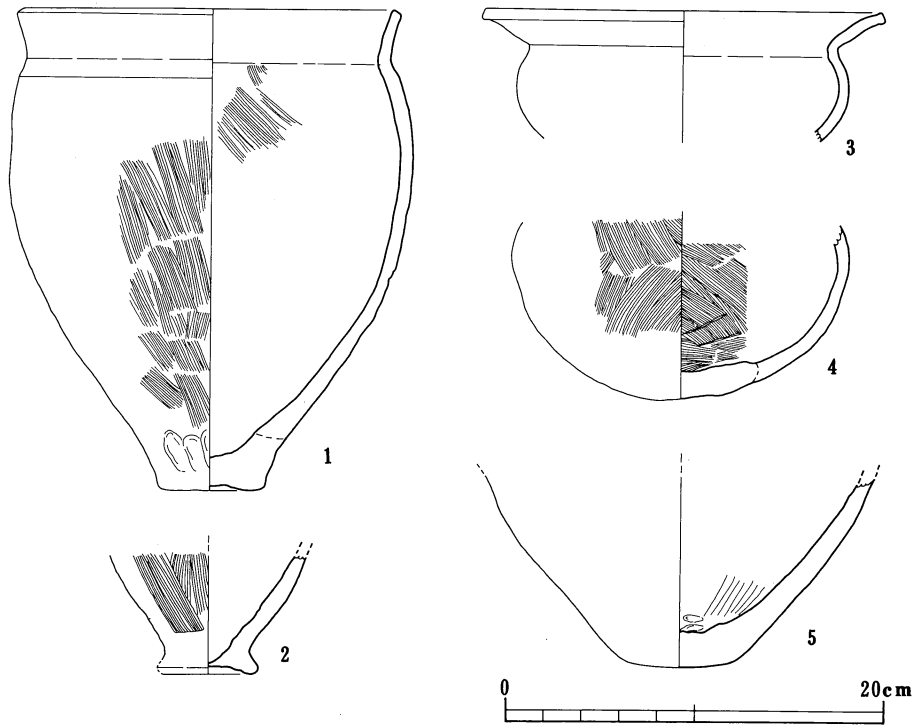
第6図 SA32出土土器実測図(縮尺1/4)

表2 SA32土器観察表

図 番 号	遺 構 名	遺 物 番 号	器 種	調 整		焼 成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第6図	SA32	1	壺	ハケ目の上 をヘラ磨き	ハケ目	良好	にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 黒褐(10 YR 3/1)	にぶい褐 7.5 YR 7/3	1~2mm大の砂 を含む	
"	"	2	高耳	ハケ目	ハケ目	やや 不良	浅黄橙 10 Y R 8 / 4	浅黄橙 10 Y R 8 / 3	1mm大の砂粒を 多く含む	刻み突帯 あり
"	"	3	甕	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙 7.5 Y R 7 / 3	にぶい橙 7.5 Y R 7 / 3	1~3mm大の石 砂粒を含む	
"	"	4	甕	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 Y R 8 / 4	にぶい橙 5 Y R 7 / 4	1~2mm大の砂 粒を含む	
"	"	5	甕・ 底部	ハケ目	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 Y R 8 / 3	明褐灰 7.5 Y R 7 / 1	1~2mm大の砂 粒を含む	
"	"	6	甕・ 底部	ハケ目	ナデ	良好	浅黄橙 10 Y R 8 / 3	浅黄橙 10 Y R 8 / 3	1~2mm大の砂 粒を含む	



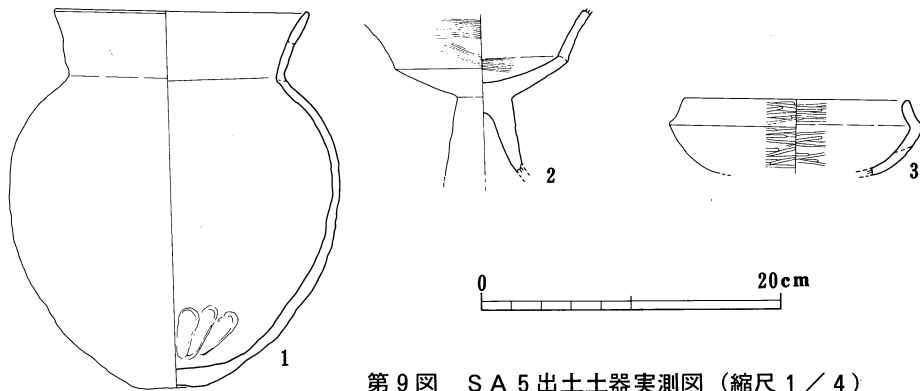
第 7 図 SA 5・6 竪穴住居跡実測図 (縮尺 1/40)



第8図 SA 6 出土土器実測図 (縮尺 1/4)

表3 SA 6 土器観察表

図 番 号	遺構名	遺物 番号	器種	調		焼成	色		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第8図	SA 6	1	甕	ハケ目	ハケ目	良好	にぶい橙 7.5 YR 7/4	にぶい黄橙~ 10YR 7/3 褐灰色(10YR 4/1)	1~5mm大の石 砂粒を含む	スス附着
"	"	2	甕底 部	ハケ目	ナデ	良好	橙 5 YR 7/6	橙 7.5 YR 7/6	1~4mm大の石 砂粒を含む	
"	"	3		ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/6	浅黄橙 7.5 YR 8/6	細砂粒を含む	
"	"	4	壺	ハケ目	ハケ目、 ナデ	良好	浅黄橙 10YR 8/3	褐灰色 10YR 4/1	1~3mm大の砂 を含む	
"	"	5	甕底 部	ハケ目のあ とナデ		良好	にぶい橙 7.5 YR 7/4	浅黄橙 10YR 8/3	1~3mm大の砂 粒を含む	



第9図 SA 5出土土器実測図（縮尺1/4）

表4 SA 5土器観察表

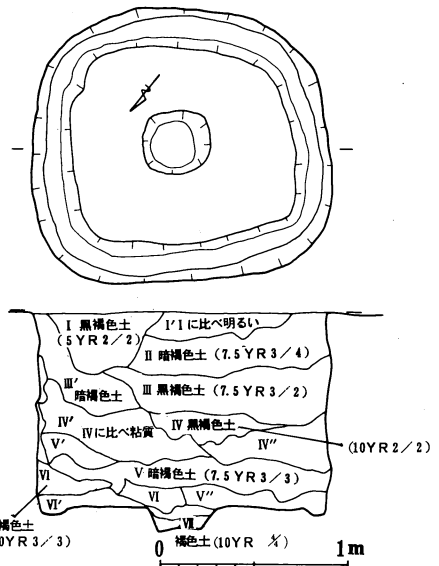
図面 番号	遺構名	遺物 番号	器種	調整		焼成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第9図	SA 5	1	壺	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙 7.5 YR 7 / 4	にぶい橙 7.5 YR 7 / 4	1mm~3mm大の 石粒を含む	スス付着
"	"	2	高環	ハケ目、 ナデ	ハケ目、 ナデ	やや 不良	浅黄橙 7.5 YR 8 / 4	浅黄橙 7.5 YR 8 / 4	砂質、石英砂を 含む	
"	"	3	環身	ヘラ磨き	ヘラ磨き	良好	橙 2.5 YR 6 / 6	橙 5 YR 7 / 6	石英砂を含む	丹塗り (?)

いは突帯文を施す甕形土器が中心である（第4図）。

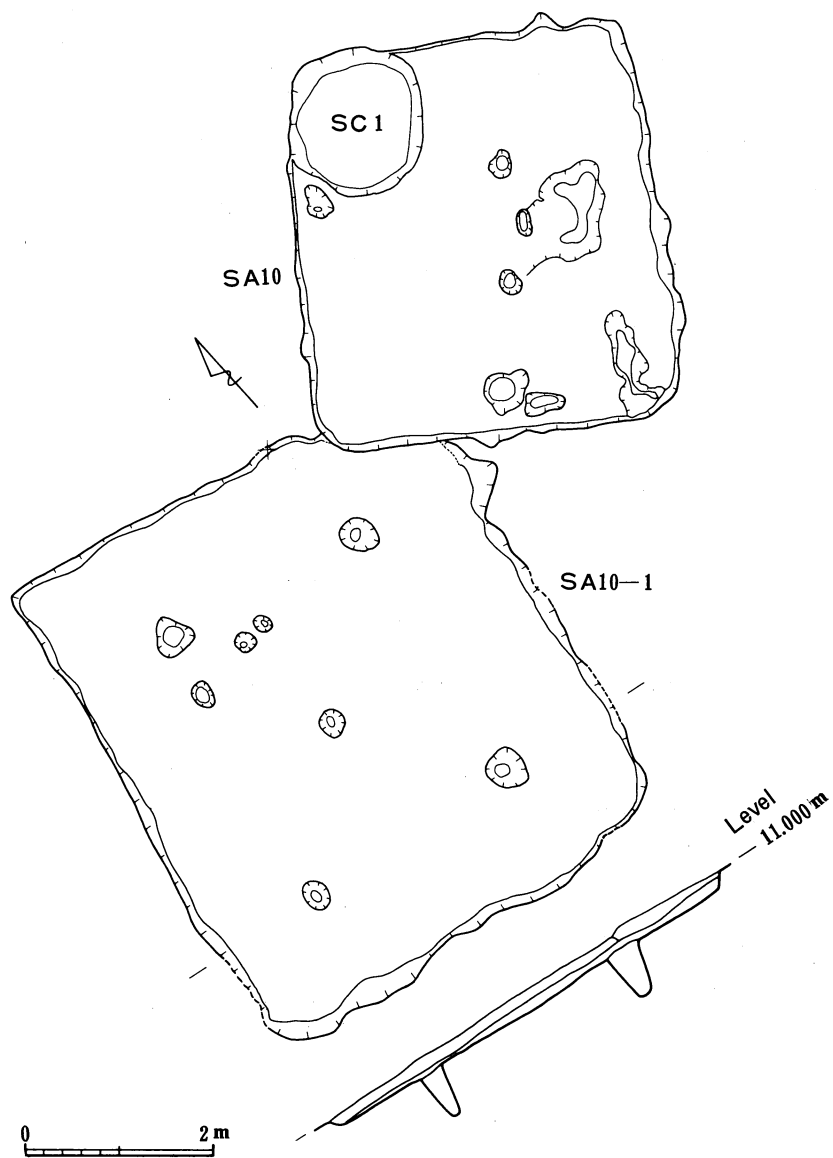
しかし、ほぼ同時期これら円形住居跡のほかには方形住居跡も存在しており、平面プランの違いが示され問題は複雑である。SA 32（第5図）は全体形が不明であるが、特徴的には壺形土器（第6図1）が良好に床面に遺存していた。

これら中期の住居跡の後、現段階での整理では厳密を期し難いが、しばらくの空白があり、後期の間仕切り住居の時代を迎える。SA 6（第7図）

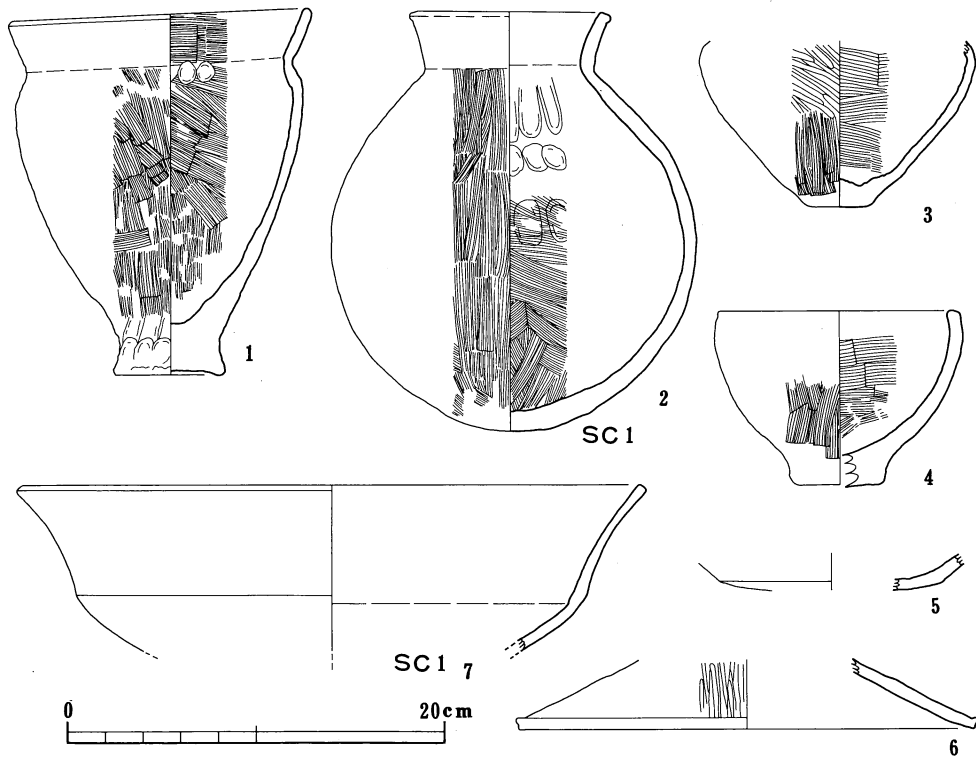
・SA 50・SA 53などが代表であるが、全体の中に占める割合は多くはない。このことは、熊野原遺跡⁽⁴⁾・堂地東遺跡⁽⁵⁾などと比べ留意する必要がある問題である。



第10図 SC 12貯蔵穴実測図（縮尺1/40）



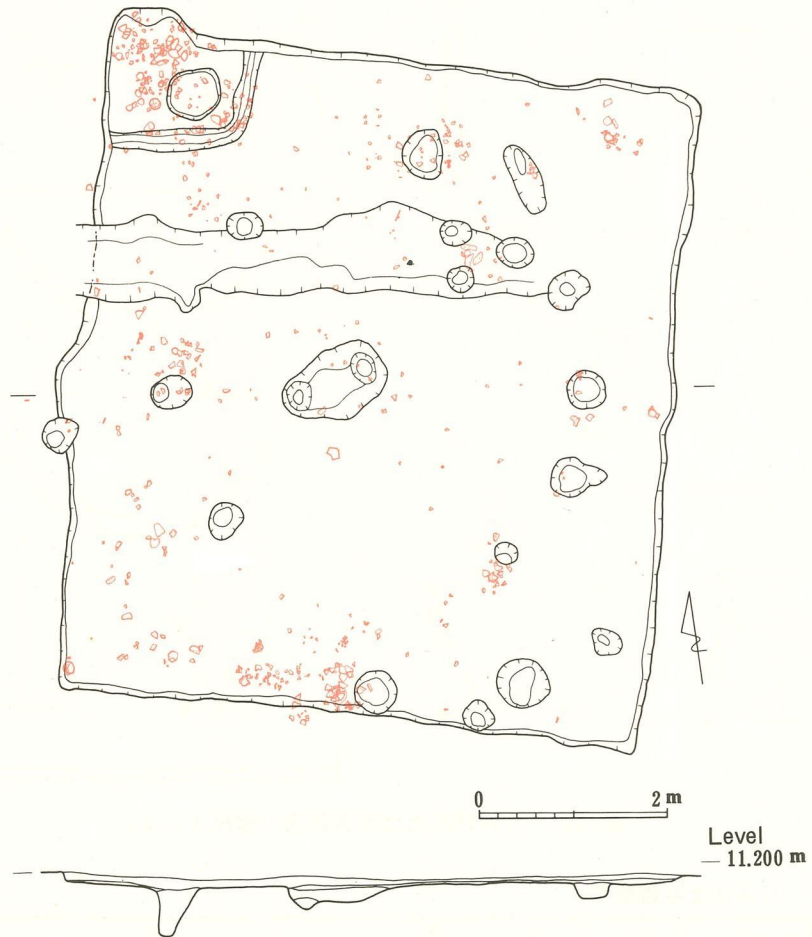
第11図 SA10・SA10-1 竪穴住居跡実測図 (縮尺 1/40)



第12図 SA10・SA10-SC1出土土器実測図(縮尺1/4)

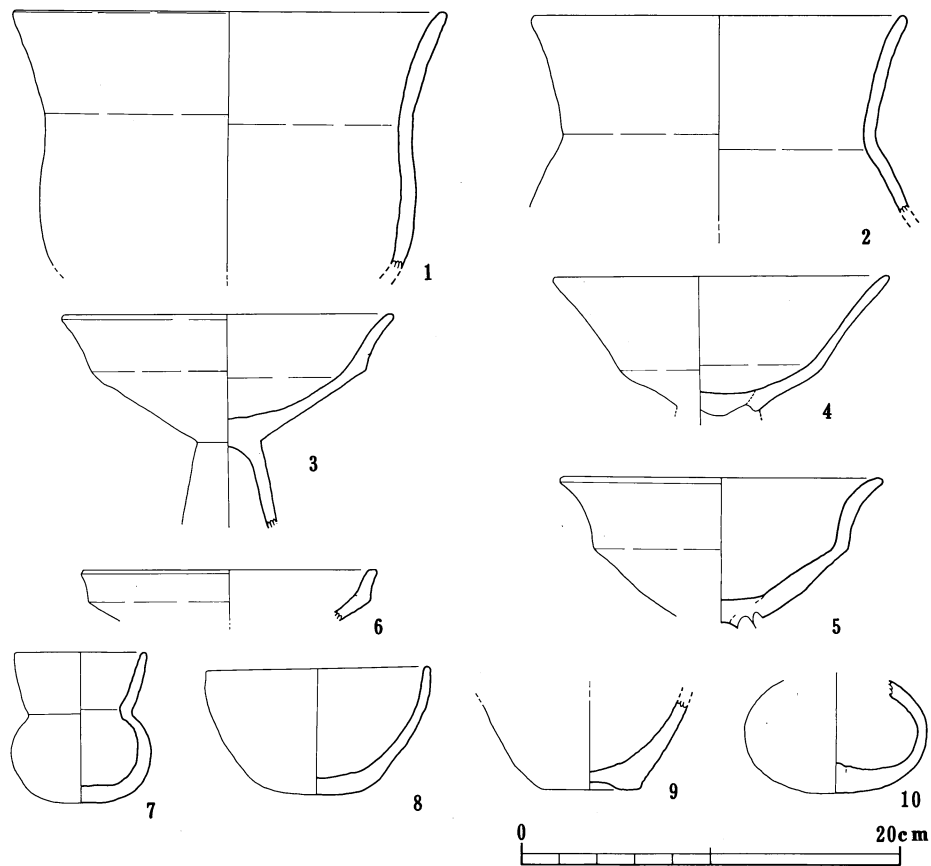
表5 SA10土器観察表

図面 番号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第12図	SA10	1	甕	ハケ目	ハケ目	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/6	橙 5 YR 7/8	2~3mm大の砂 粒を含む	スス付着
"	"	2	壺	ハケ目	ハケ目	良好	橙 5 YR 7/6	浅黄橙 7.5 YR 8/6	1~3mm大の砂 粒を含む	丸底
"	SA10	3	壺	ヘラ磨き、 ハケ目	ハケ目	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/4	にぶい黄橙 10 YR 6/3	1~2mm大の砂 粒を含む	
"	"	4	鉢	ハケ目	ハケ目	良好	浅黄橙 10 YR 8/4	浅黄橙 10 YR 8/4	1~3mm大の砂 粒を含む	
"	"	5	高坏 坏部	ハケ目のあ とナデ	ハケ目のあ とナデ	良好	にぶい橙 7.5 YR 7/4	浅黄橙 10 YR 8/3	0.5~1mmの細 砂粒を含む	
"	"	6	高坏 脚部	ヘラ磨き		良好	橙 2.5 YR 7/6	橙 5 YR 7/6	0.5~1mmの細 砂粒を含む	
"	"	7	高坏	ヘラ磨き (風化著しい)	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/6	浅黄橙 7.5 YR 8/6	1mm大の砂粒を 含む	



第13図 S A 16 竖穴住居跡実測図 (縮尺 1/40)

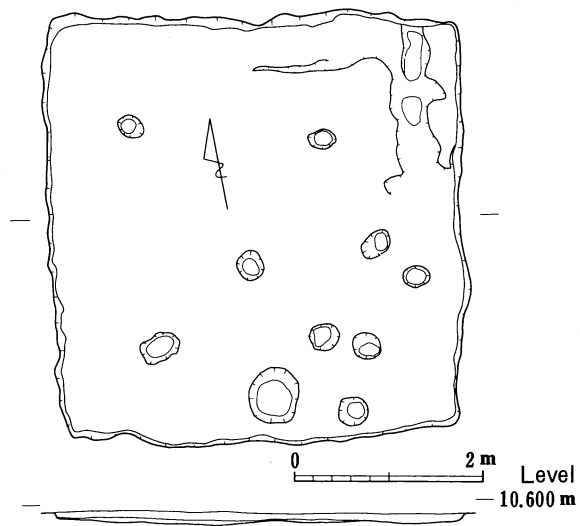
こうした住居跡のほかにも本遺跡で注目されるものは、ことに遺跡の北東の区域に集中してみられる貯蔵穴である。円形に限りなく近い隅丸のプランと床面中央に柱穴をもつ S C 12 (第10図) などはその最も特徴的なものである。また、貯蔵穴が住居内に設けられたと見られる例 (第11図) もあり、これまでの他の学園都市遺跡群のなかでは検出されることのなかった貯蔵穴の存在は貴重である。



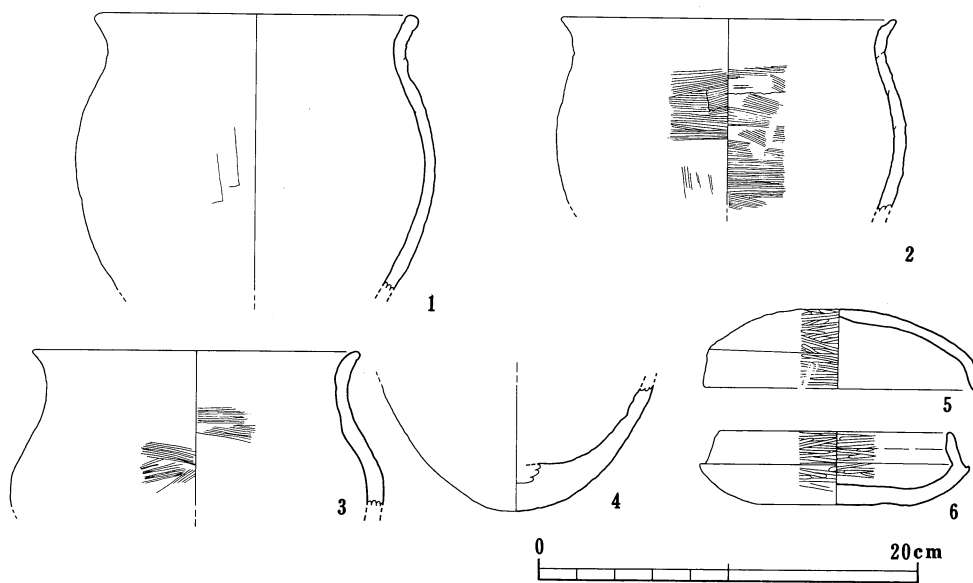
第14図 SA16出土土器実測図(縮尺1/4)

表6 SA16土器観察表

図 番 号	面 号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
					外 面	内 面		外 面	内 面		
第14図	SA16	1	甕	ナデ	ナデ	良好	橙 7.5 YR 6/8	橙 7.5 YR 7/6	0.5~2mm大の 石砂粒を含む	スス附着	
"	"	2	甕	ナデ	ナデ	良好	橙 7.5 YR 7/4	橙 7.5 YR 7/4	0.1~3mm大の 石砂粒を含む	スス附着	
"	"	3	高坏	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙 5 YR 7/4	浅黄橙 7.5 YR 8/4	0.5~2mm大の 砂粒を含む		
"	"	4	高坏	ナデ	ナデ	良好	橙 5 YR 7/8	橙 5 YR 7/8	0.5mm大の細砂 粒を含む		
"	"	5	高坏	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 10 YR 8/3	灰白 10 YR 8/2	1mm大の砂粒を 含む	スス附着	
"	"	6		ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/4	浅黄橙 7.5 YR 8/4	細砂粒を含む		
"	"	7	小型 丸底壺	ナデ	ナデ	良好	橙 5 YR 7/6	橙 2.5 YR 6/8	1mm大の砂粒を 含む		
"	"	8	碗	ナデ	ナデ	良好	橙 2.5 YR 6/6	橙 7.5 YR 6/6	細砂粒を含む		
"	"	9	底部	ハケ目のあ とナデ	ナデ	良好	橙 5 YR 7/6	浅黄橙 7.5 YR 8/6	0.5~2mm大の 砂粒を含む		
"	"	10	丸底壺	ナデ	ナデ	良好	黄灰 2.5 Y 4/1	浅黄橙 7.5 YR 8/6	1mm大の砂粒を 含む		



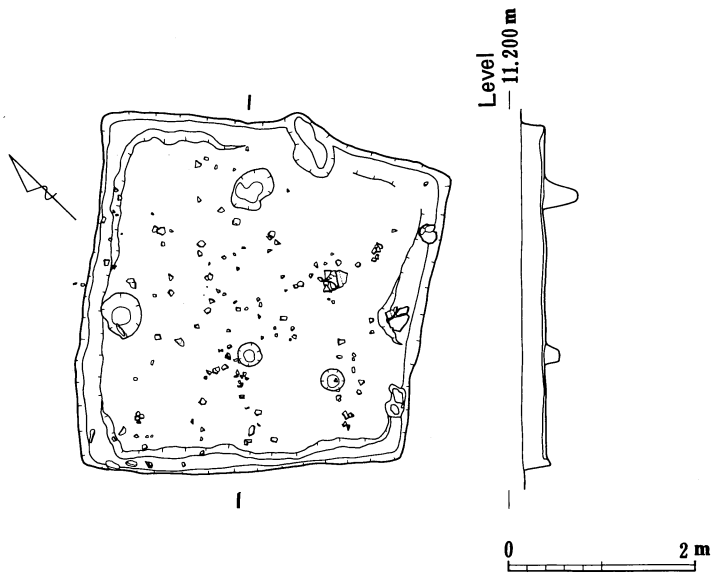
第15図 SA28竖穴住居跡実測図 (縮尺 1 / 40)



第16図 SA28出土土器実測図 (縮尺 1 / 4)

表7 SA 28土器観察表

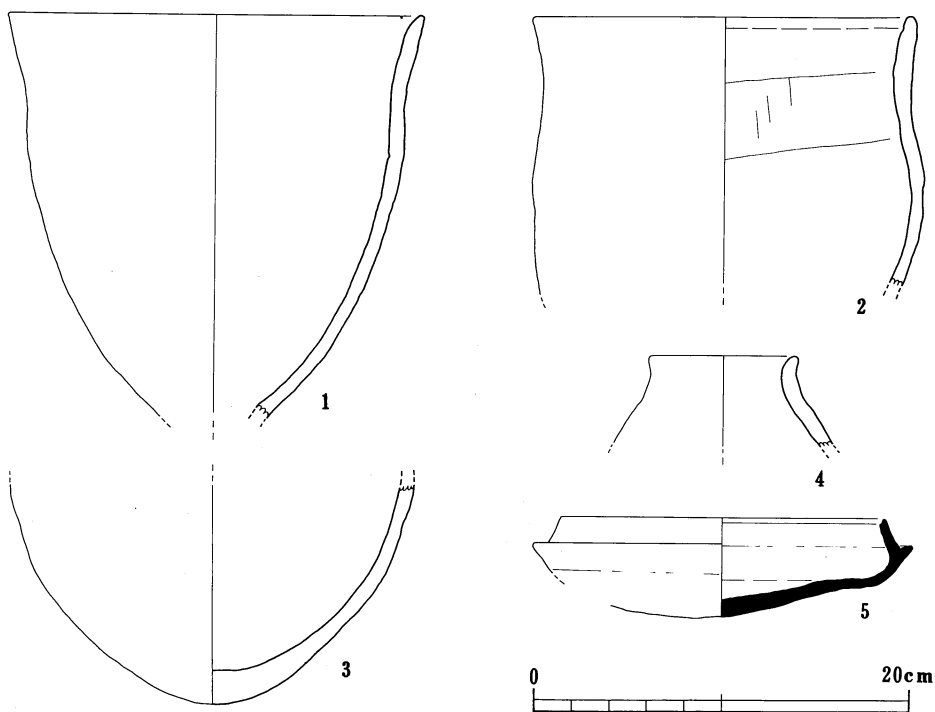
図面 番号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
第16図	SA 28	1	甕	ナデ	ナデ	良好	橙 7.5 YR 7/6	橙 5 YR 6/8	3~5 mm大の石 砂粒を多く含む	1と4は 同一個体
"	"	2	甕	ハケ目	ハケ目	良好	にぶい橙 7.5 YR 7/4	灰黄褐 10 YR 4/2	3~5 mm大の石 砂粒を多く含む	スス付着
"	"	3	甕	ハケ目のあ とナデ	ハケ目	良好	浅黄橙 7.5 YR 8/4	浅黄橙 7.5 YR 8/4	1~3 mm大の石 砂粒を多く含む	
"	"	4	甕・ 底部	ナデ	ナデ	良好	橙 7.5 YR 7/6	橙 5 YR 6/8	3~5 mm大の石 砂粒を多く含む	
"	"	5	坏蓋	ヘラ磨き	ナデ	良好	橙 5 YR 7/6	橙 5 YR 7/6	1~2 mmの砂粒 を含む	
"	"	6	坏身	ヘラ磨き	ヘラ磨き	良好	橙 5 YR 6/6	橙 5 YR 7/8	1~2 mmの砂粒 を含む	



第17図 SA 15 竪穴住居跡実測図 (縮尺 1/40)

表 8 SA15土器観察表

図 番 号	面 号	遺構名	遺物 番号	器種	調 整		焼成	色 調		胎 土	備 考
					外 面	内 面		外 面	内 面		
第17図	SA15	1	甕	ナデ、削り	ナデ	良好	橙 5YR 7/8	黄灰 2.5Y 7/2	1~3mm大の砂粒を多く含む	スス附着	
"	"	2	甕	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙 10YR 8/4	黄灰 2.5Y 6/1	細砂粒、1~3mm大の砂粒を多く含む		
"	"	3	甕・底部	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙 7.5YR 7/4	黄灰 2.5Y 4/1	1~3mm大の砂粒及び4~6mm大の石砂粒	スス附着	
"	"	4	壺	ナデ、磨き	ナデ、磨き	良好	浅黄橙 10YR 8/3	浅黄橙 2.5Y 6/2	1mm大の砂粒		
"	"	5	須恵器 坏身	ナデ	同心円文叩き	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	1~3mm大の砂粒を含む		



第18図 SA15出土土器実測図 (縮尺 1/4)

古墳時代

小型丸底壺（第14図7）から6世紀代の須恵器（第18図5）までを摘出し、古墳時代とすることができる。ここでは円形のプランはみられずすべて方形住居跡である。S A 5（第7図）・S A 15（第17図）などのように一辺4 m前後のやや小型の住居跡とS A 16のように大きめの住居跡とがある。

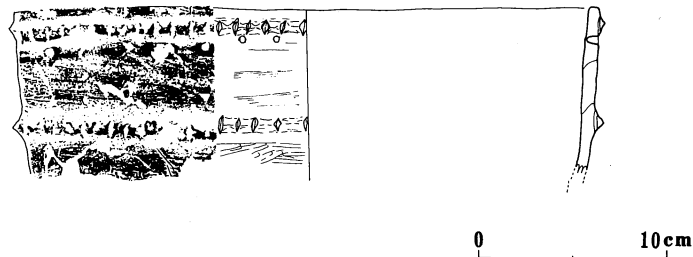
古代以降

検出された掘立柱建物跡はおおよそ50棟分を数える。分布の場所は、北東の区域、中央の区域、そして南西の区域に集中する。さらにそれらは、溝によって区画され、明瞭な在り方としては北東の区域に見ることができ、溝の南辺に陸橋部を設け、その中に掘立柱建物を配する。詳細には出土遺物の検討に待たねばならないが、56年の成果によれば13世紀を中心とし近世に至るものとみられる。また、これらの遺構は東に所在する今江城（仮称）との関連も考えられるものである。

さらに、近世墓がただ2基だけ検出され、そのうちの1基からは盃と銅銭さらに棺材とみられる木片と銅片が遺存度の悪い人骨とともに出土している。

IV、ま と め

8箇月余におよぶ調査期間は、30,000 m²という遺跡面積にたいして決して十分なものではない。むしろ、無謀な期間といえる。それ故旧石器時代の追及等に問題を残しているとはいえ、幸か不幸か耕土を除去すれば遺構面が露出するという遺跡の遺存状態がまがりなりにも調査の遂行を可能にしたといえる。



第19図 前原北遺跡出土刻目突帯文土器実測図（縮尺1/4）

地形的な制約からも、調査で把握しえた範囲は集落の自己完結した範囲と理解する事ができる。弥生時代の各期の集落を想定するとき、かつて都城市祝吉遺跡で指摘したように同時⁽⁶⁾期において円形と方形の住居跡が存在する可能性がまた指摘できる。少なくとも、近接した時期幅のなかに単一な住居形態のみが存在するのではない事だけは確実である。

さらに、掘立柱建物の溝に区画された単位を割りだすことも本遺跡の成果で可能に成った。しかし、それは遺物の検討に肉付けされ、変遷過程も含めより立体的になるであろう。

(北 郷 泰 道)

注

- (1) 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(Ⅱ)，1981年
- (2) 市川米太氏への熱ルミネッセンス分析の依頼に際し、実験的に肉眼観察により加火されているか否かを意識的にサンプリングした結果、肉眼観察についてはかなりの信頼度をおくことが出来るようである。
- (3) 報告書は今春刊行の予定であるが、新富町教育委員会の御好意で資料を実見させていただいた。なお、住居跡そのものは拡張及び間仕切り住居とも関連するものである。
- (4) 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(Ⅱ)～(Ⅳ)，1981～1983年
- (5) 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集，1985年
- (6) 都城市教育委員会『祝吉遺跡』1981年

今 江 城 跡 (仮称)

I 位置と環境 (第20図)

熊野の地は、古来、「延喜式」の救麻駅に比定され、「建久図田帳」⁽¹⁾においても隈野の名がみえ、日向においても重要な地であったことが窺える。熊野は国富荘の1つで、中世になり隈野を熊野氏、加江田を岡富氏に分領されている。以後、所領争いの拡大に伴いこの地でも、山東に進出しようとする島津氏と飢肥を得ようとする伊東氏との攻防の場となっていくのである。その重要性を裏付けるがごとく付近には清武城、車坂城、曾井城、紫波洲崎城などがみられる。

当山城は、文献等にそれに匹敵する名が見られず、字名をとって「今江城」とした。

今江城は学園都市遺跡群の東端の標高約37mのところであり、清武川に面している。なお、今江城が占地する丘陵の先端部には諏訪神社が建立されている。遺跡群の中には今江城と車坂城が存在し、車坂城は今江城とは約300m離れ、加江田川に面している。また、同時期の遺跡としては前原北遺跡、前原西遺跡⁽²⁾、堂地東遺跡⁽³⁾、山内石塔群⁽⁴⁾がある。

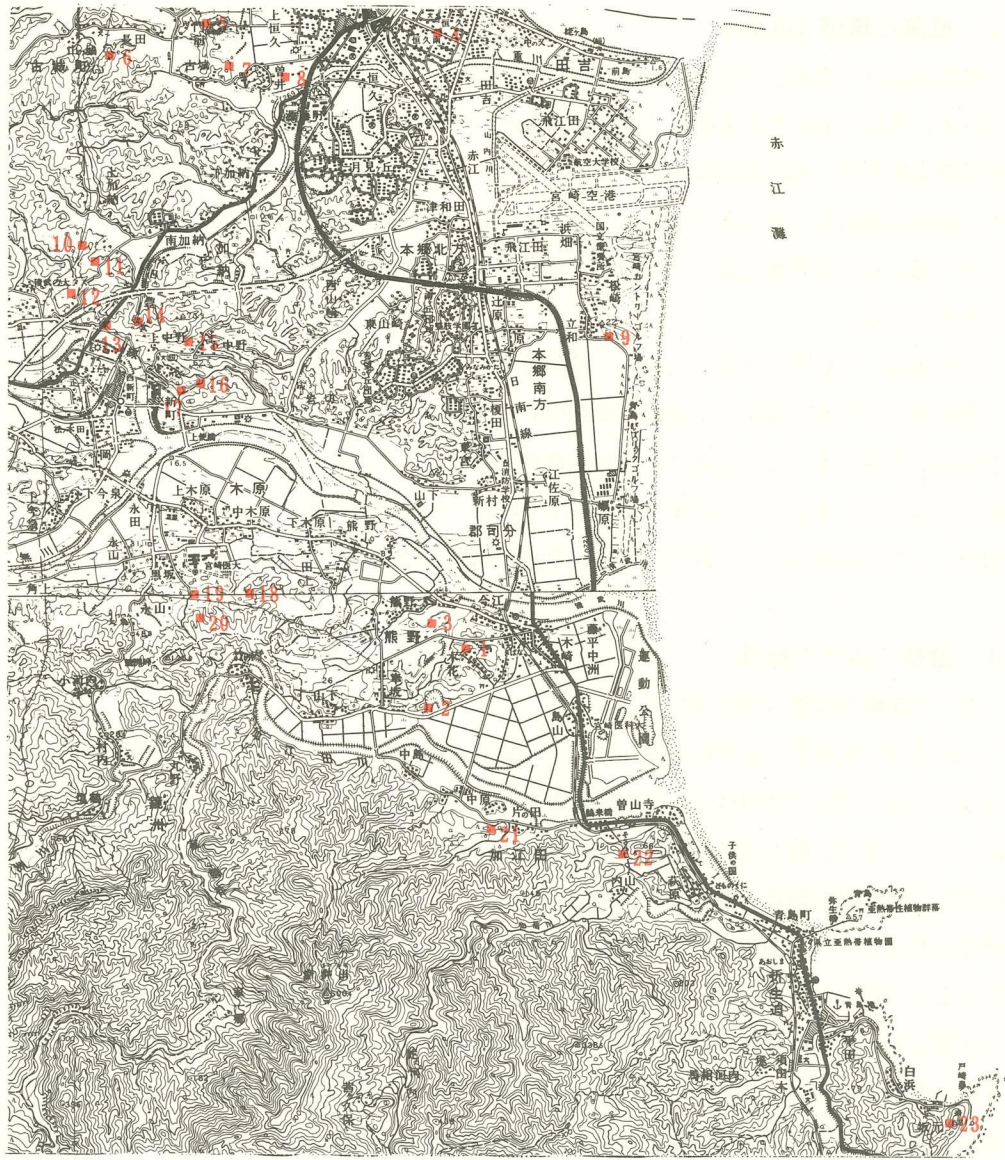
II 遺構・遺物の概要

(1) 今江城の概要 (第21図)

今江城は、南東側はすでに土取りによって削平されており、3つあるいは北側に舌状に延びた平坦面を曲輪とすれば $4 + \alpha$ の曲輪があったと考えられる。そのなかで最も標高が高い南端に位置する曲輪が主郭と想定される(第1曲輪)。土塁は東側と南西部分に現存し、そのほかの曲輪縁辺部にも若干の高まりが見られることなどから周囲に土塁が巡らされていた可能性がある。第2曲輪は、第1曲輪の北東に位置し約5m離れている。土塁は南側に一部残存しているだけであった。第2曲輪の北側の下方に2重に巡らされた土塁がみられ、上方の土塁は第3曲輪の南側まで延びている。第3曲輪は、第1曲輪の東、第2曲輪の南に位置する。曲輪の南側はすでに土取りによって消失しており、その規模や遺構については不明である。第3曲輪の東側も消滅しているため曲輪の有無は明らかでないが、城のなかで最も弱い箇所である北東部の防御を考えると、そこには何らかの施設が設けられていた可能性がある。

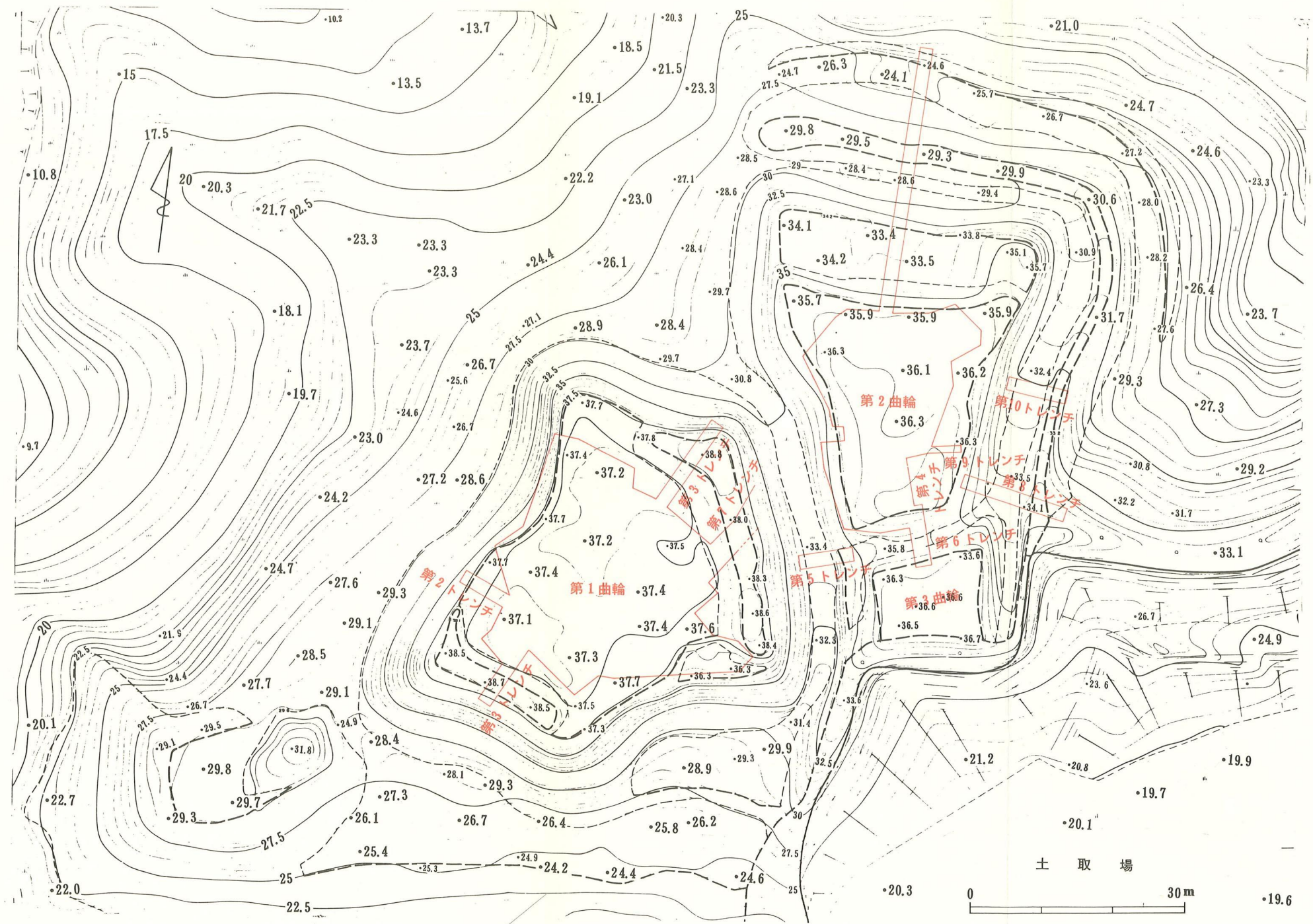
堀は曲輪の周囲をめぐり、各曲輪がそれぞれ独立した様相を呈している。深さ約2mを測り、薬研掘りである。

曲輪内の遺構では、柱穴や土壇等を主に検出した。第1曲輪では井戸1基、第2曲輪では2間×3間で東西に庇をもつ建物跡1棟が確認され、当時の城内での生活を考えるうえで貴



1. 今江城 2. 車坂城 3. 前原西遺跡 4. 福長院跡 5. 今福寺跡 6. 山の城跡 7. 古城跡 8. 曾井城跡 9. 松崎寺跡 10. 観音寺跡 11. 中山寺跡 12. 清武城跡 13. 古城跡 14. 玄法院跡 15. 蓮徳寺跡 16. 安楽寺跡 17. 文永寺跡 18. 長明寺跡 19. 勢田寺跡 20. 山内石塔群 21. 円南寺跡 22. 曾山寺跡 23. 紫波洲崎城

第20図 周辺遺跡位置図



第21図 今江城遺構配置図 (縮尺 1 / 200)

重な成果といえる。

遺物としては、土師器の坏・皿、青磁、白磁、備前焼等が出土している。しかし、清武城⁽⁵⁾や中之城跡等のように多量の染付や陶磁器が出土していないことから中心的城ではなかったとも考えられる。⁽⁶⁾

また、土塁の各所にトレンチを設定したが、第1曲輪の第2、4トレンチにおいて土塁上に柱穴が確認され、防御施設としての柵あるいは板塀があったことが想定される。そのほか、土層の堆積状態から2、3回の増改築が行われたようである。

(2) 第1曲輪

標高が約37mと曲輪のなかでは最も高く主郭として考えられる。城域では南端にあたる。

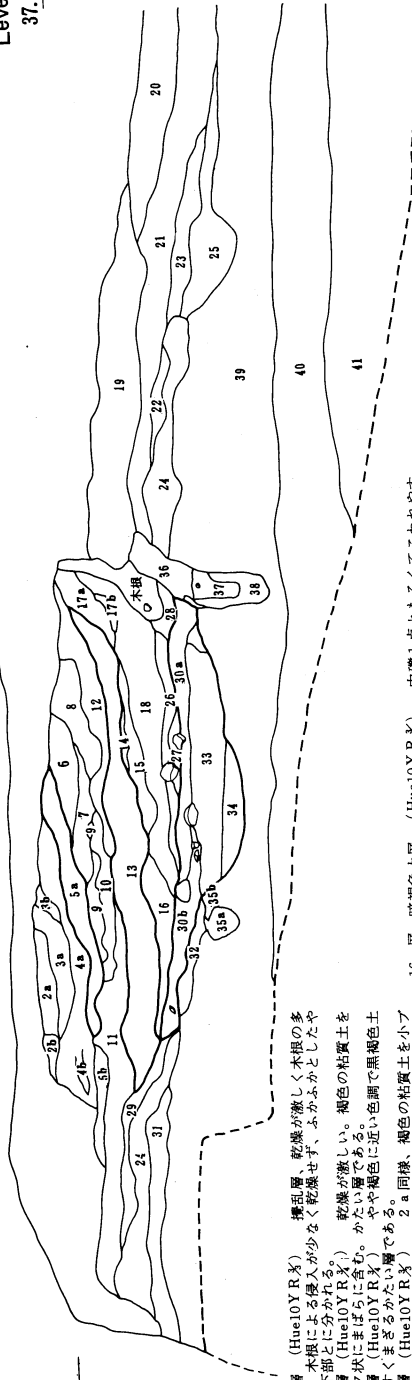
土塁は、第2曲輪と第3曲輪に面した箇所(第1土塁)と南端の部分に現存する。しかし、縁辺部にも若干の高まりがみられることから、曲輪の四周には土塁が巡らされていた可能性がある。第1土塁は、高さ約2.1m、幅約9mを測る。土層を観察すると3枚の固く締められた層が認められ、3回の増築あるいは、3回程度の補強を行って一時期に築造したとも考えられる。また、土塁の頂部より外側に下ったところに柱穴痕が認められ、柵、あるいは板塀などの防御施設の存在が想定される(第23図)。これは、第3トレンチの土層においても認められる(第22図)。

曲輪内の平坦地は約210㎡あり、柱穴、土壇10基、井戸1基を検出した。

出土遺物では、土師器、陶磁器、弥生土器がある(第24図)。

1～8は土師器坏・皿である(表9)。1～4、6はヘラ切り底、5、7、8は糸切り底を呈す。1は体部に調整による凹凸を残し、器形から山内石塔群におけるA-I類に類似する。⁽⁷⁾ヘラ切り底のものは体部と底部との境が明瞭で体部が比較的厚手である。9、10は備前焼甕である。口縁部上方で折り曲げられ玉縁を呈す。9は口径約32cmを測る。内外面とも赤褐色で、横ナデ調整。10は灰黄褐色をなす。11～13は青磁である。11は端反り碗で口径16.2cmを測る。オリーブ灰色の釉が施される。12も端反り碗で口径14.6cm。オリーブ灰色の施釉。釉は薄く、全体に細かい貫入がはいる。体部下半にはヘラ削りによる稜が明瞭に残る。13は盤で口縁部が稜花をなす。口縁内部にヘラ描きによる線文が施される。口径24.6cmを測る。オリーブ黄色の施釉。14は白磁で八角形をなす高台付きの小鉢である。底部と体部の境から伸びる8本の稜線は口縁部までとどかず途中で消える。見込み部には花文が施される。高台は面取りされやや上げ底気味で、露胎となる。15～18は弥生土器である。15は口縁がくの字をなしその直下に一条の刻み目突帯を有する甕形土器である。外面には多量にススが付着。

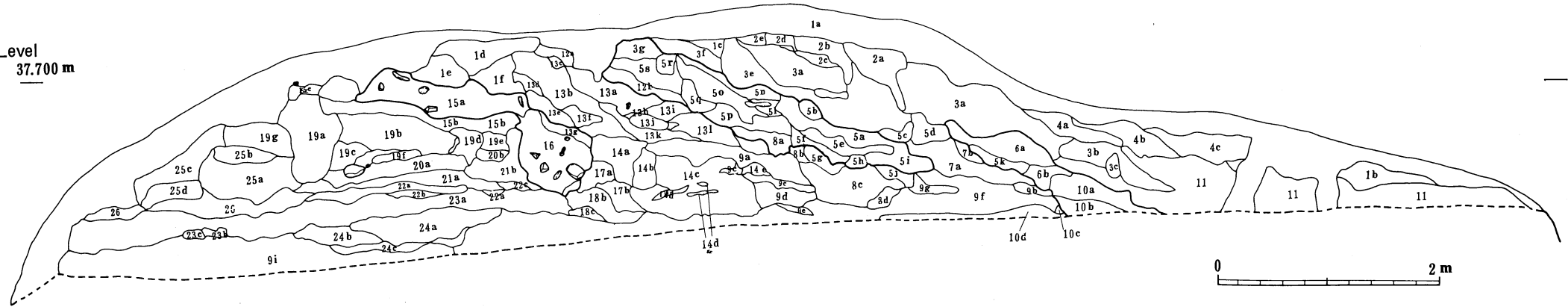
Level
37.30 m



- 1 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 構乱層、乾燥が激しく木根の多い上部と、木根により侵入が少なく乾燥せず、ふかふかとしたやわらかい下部とに分かれる。
- 2 a 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 乾燥が激しい。褐色の粘質土を小プロック状にまばらに含む。かたい層である。
- 2 b 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) やや褐色に近い色調で黒褐色土が一部より多くまざるかたい層である。
- 3 a 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 2 a 同様、褐色の粘質土を小プロック状にまばらに含むが、黄褐色調が強い。かたい層である。
- 3 b 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 褐色の粘質土がややプロック状に入り乾燥している。かたい層である。
- 4 a 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色の粘質土が主体で上部に 3 a 層の暗褐色土がまざる。一部乾燥気味のところもある。かたい層である。
- 4 b 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土が主で、褐色の粘質土を少量含む。
- 5 a 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色の粘質土を少量と含む。強い粘性がある。かたい層である。
- 5 b 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 5 a 層とほぼ同様であるが、明褐色の粘質土は含まない。
- 6 層 黄褐色粘質土層 (Hue10YR 5) やや乾燥して黄褐色を呈する粘質土と、選り気を帯びた黄褐色粘質土とからなる。かたい層である。
- 7 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 5 a 層より粘質土のまざりが少なく、やや明るい色調である。
- 8 層 黄褐色粘質土層 (Hue10YR 5) 6 層とほぼ同様であるが、乾燥がややややく、12層の褐色土を一部含む。
- 9 層 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 5) 黄褐色の粘質土をプロック状にする。
- 10 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 褐色の粘質土が粒子状に細かくはいる。かたい層である。
- 11 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 小礫及び褐色の粘質土を少量とまばらに含む。5 b 層よりやや明るい色調である。かたい粘性層である。
- 12 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 一部乾燥気味のところもあり色調が若干ばらつく。少しふかふか。
- 13 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) もろくくてかわれやすい小礫を少量と 2〜3 点を含む。明褐色の粘質土を一部少量含む。かたい粘性層がある。
- 14 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 明褐色の粘質土を一部少量含む。かたい層である。
- 15 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 褐色の粘質土がややプロック状にかたくて強い粘性がある。
- 16 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 中礫 1 点とともろくくてかわれやすい小礫少量とを含む。褐色の粘質土をまばらに含む。
- 17 a 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) やや乾燥気味の層。褐色や暗褐色の粘質土を少量含む。粘性もある。かたい層である。
- 17 b 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 17 a 層と同様であるがやや色調が強い。
- 18 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 選り気がありつやや、明褐色の粘質土を少量含む。17 a 層よりやや選り気をおびたかたい層である。
- 19 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 選り気がある。暗褐色の粘質土を少量含む。粘性もある。かたい層である。
- 20 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層でふかふかとして非常にやわらかい。
- 21 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 南側では上部に 19 層の暗褐色土がまじり、北側では 20 層の暗褐色土の影響をうける。やわらかい層である。南側では 22 層の暗褐色土の影響が少しある。土器片 1 点を含む。
- 22 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 21 層と 24 層の中間的な層。24 層の褐色のバサバサした土が少しはいる。ふかふかとしたやわらかい層である。
- 23 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 褐色の粘質土が粒子状に細かく小プロック状に少量含む。弱い粘性がある。
- 24 層 褐色土層 (Hue10YR 5) 褐色の他に暗褐色や黄褐色の土もある。バサバサして粘性は多くふかふかとしたやわらかい層である。やや乾燥気味。
- 25 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、大部分はかたくてかわれやすい。黄褐色の粘質土を一部少量含む。
- 26 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、褐色の粘質土を少量含む。粘性もある。かたい層である。
- 27 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) やや乾燥気味でかたくてかわれやすい粘質土を少量含む。
- 28 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 18 層とほぼ同様であるが、色調が若干暗い。
- 29 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) かたくて強い粘性があり、下部には 24 層の暗褐色土がまざる。
- 30 a 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 北側では、暗褐色土を呈する。
- 30 b 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 非常に粘質土を少量含む。粘性もある。かたい層である。
- 31 層 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 5) 上部に若干 24 層の影響をうけるが、粘性の強い黄褐色土が主体でかたくてかわれやすい。乾燥気味。
- 32 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 30 層より黄褐色調が強い。非常に粘質土を少量含む。
- 33 層 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 34 層 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 35 a 層 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 35 b 層 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 36 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 37 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 38 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 39 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 40 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。
- 41 層 暗褐色土層 (Hue10YR 5) 暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。暗褐色土層で、粘質土が少なく、ややややく。乾燥気味。

第22図 第7トレンチ西壁土層断面図 (縮尺 1/50)

Level
37.700 m



- 1a 褐色土層 (Hue7.5 YR 8) 表層で攪乱されている。乾燥気味。
- 1b 褐色土層 (Hue7.5 YR 8) 木根により攪乱されている可能性が高いが表層に比べて、密に堆積している。乾燥気味である。
- 1c 暗褐色土層 (Hue7.5 YR 8) 竹根により攪乱されている。乾燥気味。
- 1d 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 小礫～中礫混り。攪乱されている可能性が高いが、割合密に堆積している。かたい。
- 1e 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 1dにくらべ、礫がやや集中している。攪乱されている。
- 1f 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 1dと同様の性質。攪乱気味。
- 2a 黄褐色土層 (Hue10YR 8) わりとかたい層である。木根による大きな塊状の中に、ブロック的に黄褐色土が入りこんでいるとも考えられる。
- 2b 褐色土層 (Hue10YR 8) 木根により攪乱されている可能性が高い。表層よりかたい。
- 2c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 木根により攪乱されている可能性が高い。表層よりかたい。
- 2d 黄褐色土層 (Hue10YR 8) におい黄褐色土、部分的に黄褐色土が入り、かたくしまった層である。
- 2e 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 表層同様にやわらかい層である。攪乱気味。
- 3a 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粒子を全体に弱く含む。木根により攪乱されている可能性が非常に高い。かたい層である。土器小片や炭を少量含む。
- 3b 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 3aと同様黄褐色の粒子を全体に弱く含む。3a層よりやわらかい。
- 3c 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 3b層と同様であるが、特にこの部分だけやわらかい。木根による攪乱穴が深い。
- 3d 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 3a層の中に、褐色の粘質土がブロック状に入っている。黒褐色で、かたくしまった層である。
- 3e 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 3a層と似ているが5n層と接する部分では明褐色の粘質土がまじる。木根により攪乱されている可能性が非常に高い。
- 3f 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土の粒子を層全体にやや強く含む。木根により攪乱されている。
- 3g におい黄褐色土層 (Hue10YR 8) 下部では明褐色の粘質土がまじる。表層に近く木根により攪乱されているが、かたくしまった層である。
- 4a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 木根により攪乱されている可能性が高い。ややかたい層である。
- 4b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 4a層と同様であるが、上部はやわらかく、下部はかたくしまった層である。やや攪乱気味。
- 4c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 上部ではやわらかく、下部はかたくなくなる。攪乱されている可能性が高い。土器小片を少量含む。
- 5a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 3a層の黒色土、明褐色の粘質土、及びやや粘性のある黒褐色土がまじりあった状態である。黒褐色土の割合が大きい。かたくてやや乾燥気味。
- 5b 明褐色粘質土層 (Hue7.5 YR 8) 明褐色の粘質土が主体で、3a層の黒色土が少量まじる。
- 5c 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 5a層と同様であるが、粘性のある褐色土がブロック状に入る。明褐色の粘質土は粒状に少量まじり、3a層の黒色土の割合が大きい。
- 5d 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 5cよりやや黒味が弱い。粘性のある褐色土がブロック状に入る。炭を一部含む。
- 5e 明褐色粘質土層 (Hue7.5 YR 8) 明褐色の粘質土の入り方が5b層より弱い。他に黒色土、黒褐色土がまじる。かたく乾燥気味である。
- 5f 褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土が粒状に少量まじる。明褐色の粘質土も少くない。いくぶん黒味をまじてくる。かたい層である。
- 5g 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土が粒状に少量まじるが、その割合は5f層よりかなり少ない。
- 5h 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 5e、5fにくらべてやや黒味がつよい。
- 5i 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 一部3a層の黒色土や、黄褐色の粘質土、砂質土を含む。5h層よりやや暗い。土器小片を含む。
- 5j 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土を部分的に含む。5i層よりやや褐色味をおびる。
- 5k 黄褐色土層 (Hue10YR 8) 明褐色の粘質土が、ブロック状にややぎっしり入っている。他にb層の黒色土や7b層の褐色土がまじる。
- 5l 黒褐色粘質土層 (Hue10YR 8) やや乾燥気味でかたい層である。黄褐色の粘質土が少量まじる。
- 5m 黄褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 粒状の黄褐色のやや砂質っぽい土を少量含む。
- 5n 黄褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 3f層の黒褐色土と、明褐色の粘質土がまじりあった状態では、明褐色の粘質土の方が強く、明るい色調である。
- 5o 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 粘性があると思われるが乾燥が激しい。黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土を少量点状に含む。
- 5p 褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土や、黄褐色の粘質土、砂質土が小礫状に入り明らかな感じの色調である。
- 5q 黄褐色粘質土層 (Hue10YR 8) もろくてこわれやすい砂質？の礫や黄褐色土、黄褐色の粘質土と、5o層の黒褐色土が、まじりあった状態である。
- 5r 黄褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 黄褐色、黄褐色の粘質土と黒褐色土がまじり入っている。黄褐色の粘質土が、ややブロック状にはいる。
- 5s 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 乾燥が激しく、粘性については不明。黄褐色、黄褐色の粘質土が少量点状に入っている。5r層よりは、やややわらかい。
- 6a 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 5k層の明黄褐色粘質土等が、層全体に粒状に入る。黒褐色で、かたくしまった層である。
- 6b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 5k層と接する部分には、明黄褐色の粘質土が少量まじる。比較的やわらかい層である。
- 7a 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 5k層に近い部分では、明黄褐色の粘質土が少量まじる。6a層程ではないが、黒味が強い。
- 7b 褐色土層 (Hue10YR 8) 7a層より色調が明るく、かつ5k層のようにブロック状に明黄褐色の粘質土は含まない。(他の色は5kと同様である。)
- 8a 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 層の構成は5p層と同様であるが、5p層よりやや暗い色調である。
- 8b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) かたくしまった層はいるが、8a層はやわらかい。
- 8c 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土をまばらに少量含む。粘性に高みかたくしまっている。土器小片を少量含む。
- 8d 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 8c層と同様であるが、色調がやや暗い。
- 9a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土の粒子を全体に少量含む。暗褐色土が主で、一部にうすく黒褐色土が入る。粘性はよわい。
- 9b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 8a層と9a層の中間的な層。どちらかと言えば、9a層の影響が強い。
- 9c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 9a層と同様であるが、やや強く黄褐色の粘質土を含む。
- 9d 黒褐色土層 (Hue10YR 8) やや粘性のあるかたくしまった層である。
- 9e 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 9c層と同様で黄褐色の粘質土を多く含む。
- 9f 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 中礫～大礫が一部に入っている。もろくてこわれやすい砂質？の礫がまばらに少量入る。弱い粘性があると考えられる。少量の土器小片を含む。
- 9g 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 5i、5jと9f層との中間的な性質の層である。
- 9h 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土がブロック状に入る。
- 9i 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 9f層より、黒味がつよく、粘性もつよい。
- 10a 褐色土層 (Hue10YR 8) もろくてこわれやすい砂質の小礫を少量まばらに含んでいる。他に黄褐色の粘質土や土器小片を少量ふくんでいる。かたい層である。
- 10b 暗褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土がやや集中してはいる。暗褐色土も弱い粘性があり、かたくしまった層である。
- 10c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 10b層と同様。黄褐色の粘質土が一点に入る。
- 10d 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の細粒子が層全体に少量はいる。比較的やわらかい層である。
- 11 暗褐色土層 (Hue10YR 8) やや腐植がかった比較的やわらかい層である。土器少量を含む。
- 12a 黄褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 木根により攪乱気味ではあるが、かたい層である。
- 12b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 5s層と13a層との中間的な層である。粘性はほとんど感じられずやわらかい層である。
- 12c 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土に少量まじる。比較的やわらかい層である。土器小片一点を含む。
- 13b 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 13a層と同様であるが、やや黒味が強く、土器を含まない。
- 13c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 12a層と13b層との中間的な性質をもつ層である。
- 13d 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土が粒状にやや多くまじる。比較的やわらかい層である。
- 13e 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 13a、13b層と同様な層である。
- 13f 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 中礫2点を含む。黄褐色の粘質土がやや集中してまじる。13e層よりやややわらかい。
- 13g 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 13e層の黒褐色土と16層の暗褐色土がまじり入った状態である。比較的やわらかい層である。
- 13h 褐色土層 (Hue10YR 8) 13k層の黄褐色の粘質土が集中している部分。
- 13k 褐色土層 (Hue10YR 8) 砂質っぽい中礫を5～6点含む。他に黄褐色の粘質土、黄褐色の粘質土等がやや強くまじる。
- 13l 褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土が少量まじる。(他の色は5kと同様である。)
- 13j 褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土をほとんど含まない。褐色の地層である。
- 13i 褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土を一部少量含んでいる。13i層に比べていくぶん暗い色調である。
- 14a 黒色土層 (Hue7.5 YR 8) 黄褐色土の粒子が少量ではあるが層全体に入る。比較的やわらかい層である。
- 14b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土が14a層より強しくはいる。色調が明るい。
- 14c 黒色土層 (Hue10YR 8) 14a層よりやや黒味がつよくかたい層である。
- 14d 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土がやや強く入っている。
- 14e 黒色土層 (Hue10YR 8) 大体は14c層と同様であるが、9a層の暗褐色土が、ややまじったような状態である。
- 15a 褐色土層 (Hue7.5 YR 8) もろくてこわれやすい砂質？の礫(中～大礫)を割合と密に含む。木根により攪乱されている可能性が高くやわらかい層である。やや乾燥しやす。褐色土層 (Hue7.5 YR 8) 黄褐色の粘質土を小ブロック状に一部含む。礫はほとんど含まない。
- 15c 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 中礫混り、木根により攪乱されている。
- 16 褐色土層 (Hue7.5 YR 8) 小礫～大礫を割合に密に含む。礫の中にはもろくてこわれやすい砂質？の礫がまばらに少量入る。弱い粘性があると考えられる。少量の土器小片を含む。やややわらかい層である。
- 17a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 14a層よりやや明るい色調である。かたくしまっている。黄褐色の粒子が全体に少量はいる。弱い粘性があると考えられる。
- 17b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 17a層にくらべ、いくぶん暗褐色味が増す。
- 18a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土が16層の褐色土の中にやや強くはいる。かたい層である。
- 18b 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粒子が層全体にはいる。弱い粘性をおびていてかたくしまっている。
- 18c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 18a層と同様。黄褐色の粘質土がやや強くはいる。但し地の色は16層ではなく、9f層のものに近い。
- 19a 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 上部は攪乱されている可能性がある。比較的、やわらかな層である。黄褐色の粒子少量を含んでいる。
- 19b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土を2cm前後の大きなブロックでまばらに含んでいる。やややわらかい層である。
- 19c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 19b層と同様であるがやや色調が黒味をおびる。
- 19d 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 19e層よりは明るく、ブロックもやや多く含んでいる。
- 19e 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土のブロックを極少量含んでいる。色調は19a層に近いが、かたくしまった層である。
- 19f 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 20a層の褐色の粘質土が一部まじる。他の19層にくらべて一番黒味がつよい。
- 19g 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 黄褐色の粘質土を少量含んでいてやわらかな層である。色調は19a層よりかなり明るい。攪乱されている可能性がある。
- 20a 褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 上部に19f層の黒褐色土が少量まじる。やわらかい層で粘性も強いと考えられるが乾燥が激しいために良くわからない。
- 20b 黄褐色粘質土層 (Hue10YR 8) 20a層よりやや黄色味がつよく、かたい。
- 21a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 礫が1～2点はある。黒褐色土と褐色土がまじり入った状態である。比較的やわらかい。
- 21b 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 大体は21a層と同様であるが、褐色の粘質土がブロック状に1点はある。また黒褐色土の入り方が21a層より少ない。
- 22a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 礫2～3点を含む。褐色の粘質土と暗褐色土がまじり入った状態である。21a層より褐色土がつよくはいる。
- 22b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 22a層に比べて褐色の粘質土が均等にはいる。
- 22c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 21a層の黒褐色土が全く入らない。他に21a層と同様。
- 23a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 褐色土の粒子が層全体にはいるが、その割合は22a層、22b層にくらべると少ない。また、黒褐色土が集中している部分もある。かたくて、弱い粘性がある。
- 23b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) やわらかくて、攪乱されている可能性あり。
- 23c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 褐色土がやや集中していている。かたい層である。
- 24a 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 褐色の粘質土がブロック状にはいる。かたくしまっていて弱い粘性がある。
- 24b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 褐色の粘質土が粒状にやや強くはいる。
- 24c 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 褐色の粘質土が小ブロック状にはいる。9i層の黒褐色土もはいる。高層の中間的な層。
- 25a 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 褐色の粒子が層全体にはいる。また、26層黒色土も少量はいついて、やややわらかい層である。
- 25b 暗褐色土層 (Hue10YR 8) 褐色の粘質土がブロック状にはいる。25a層より明るい色調である。
- 25c 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 25a層と同様であるが褐色の粒子が25a層程目立たない。
- 25d 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 25c層よりやや黒味をおびている。
- 26 黒褐色土層 (Hue10YR 8) 黒色の強い部分と黒褐色土がまじる部分とがあり、下部には23a層がはいつている。

第23図 第3トレンチ東壁土層断面図 (縮尺1/50)

口径26.8cm。内面は横方向のハケ調整。胎土には0.5mm前後の砂粒を含む。色調は外面が橙色、内面が明黄褐色。焼成は良好。16は甕形土器の底部で内外面とも縦方向のハケ調整の後ナデ。胎土には1~3mm程度の砂粒を多く含む。色調は外面がにぶい橙色、内面が浅黄橙色を呈す。焼成は良好。17は複合口縁壺の口縁部である。しまりのある頸部から外湾し、拡張部が直立気味にのび口縁端部で外反する。拡張部は横ナデ、頸部はきめの細かいハケ調整。胎土には砂粒を含む。外面が浅黄橙色、内面が黄橙色をなす。焼成は良好。18は拡張部に櫛描波状文をもつ複合口縁壺である。内外面とも横ナデ。胎土には1mm前後の砂粒を多量に含む。色調は内外面とも浅黄橙色。焼成は良好。

(3) 第2曲輪 (第25図)

第2曲輪は、第1曲輪の北東に位置する。形は北側に向かった台形を呈し、その直下には2条の土塁が巡っている。曲輪には第3曲輪に面した箇所土塁が現存している。高さ1.1m、幅6mを測る。第4トレンチを設定し土層観察を行ったところ二つの固く締められた層が認められ、第1土塁と同様な構築あるいは増築の方法が窺える。(第26図)

平坦面は約520㎡あり、柱穴、土壇、カマドなどを検出した。建物跡は1棟想定され、主軸はN-75°-Wを示す。規模は2間×3間で東西に庇を有する。桁行約7.8m、梁行約7.0mを測る。柱間では桁行約2.0m、梁行約2.2mである。曲輪のほぼ中央に位置し第2曲輪の主たる建物であったと考えられる。

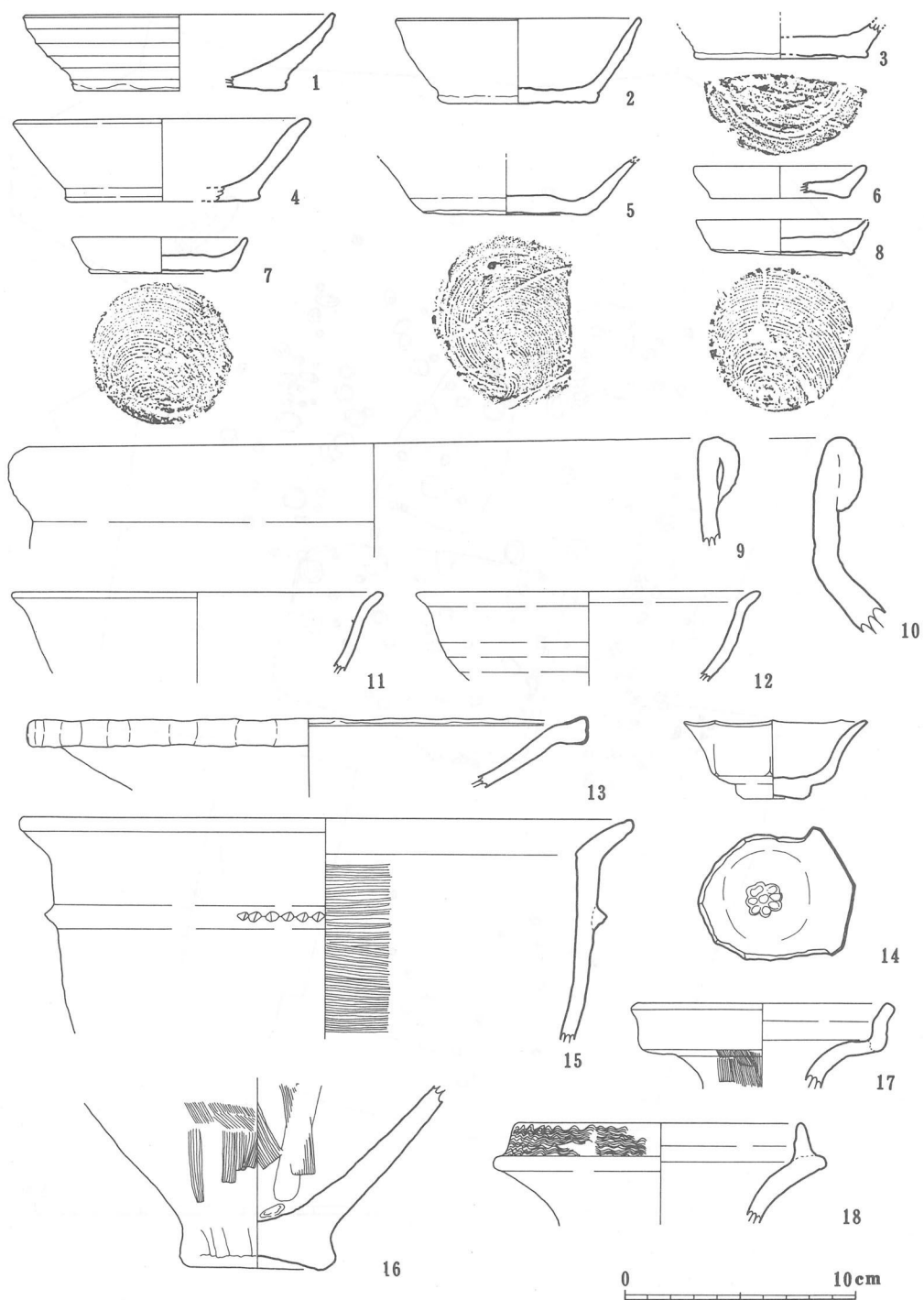
そのほかに弥生後期の住居跡3軒も検出した。

出土遺物では土師器、陶磁器、弥生土器などがある。(第27図)

19~35は土師器 杯・皿である(表10)。36~40は青磁碗である。36は端反り碗で口縁直下に4本の沈線が施される。淡オリーブの釉がかかり、細かい貫入がみられる。37は体部外面下半にヘラ削りによる稜が残る。明オリーブ灰に施釉される。38は全体にオリーブ灰色の釉が厚くかかる。39はヘラ削りのための稜がみられる。灰白色の釉がかかるが体部下半は露胎となる。40は青磁碗の底部で高台は面取りされている。明オリーブ灰色の釉がかかるが、高台手前から畳付き、高台内までは露胎となる。41、42は備前焼である。41は口縁が上方で折り曲げられ玉縁を呈す。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰褐色。頸部に自然釉がかかる。42は播鉢の口縁部で、内外面とも横ナデ調整。内面には調整後、縦の条線が施される。色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈す。口唇部から内面にかけて一部自然釉がかかる。

表9 土師器観察表(1)

番号	出土位置	器形	法量(cm)			色調		胎土	焼成	調整			備考
			口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
19	第2曲輪	坏	11.5	7.2	3.5	浅黄橙	浅黄橙	黒、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
20	"	"	11.4	8.2	3.5	浅黄橙	浅黄橙	茶、白、灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部中央部に粘土のため
21	"	"	12.8	7.4	3.2	浅黄橙	浅黄橙	黒、白、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
22	"	"	11.0	5.8	2.8	浅黄橙	浅黄橙	茶、灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
23	"	"	10.5	6.8	2.8	にぶい橙	にぶい橙	白、黒色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
24	"	"	11.8	6.2	3.2	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm~1mm前後の黒、茶の粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	
25	"	"	12.0	6.8	3.2	浅黄橙	浅黄橙	褐、白色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	風化が著しい
26	"	"	10.4	7.4	3.2	橙	橙	茶、黒色の砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	
27	"	"	-	6.0	-	浅黄橙	浅黄橙	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	一部赤味をおびたり、くすんでいる。
28	"	皿	7.8	6.7	1.25	浅黄橙	浅黄橙	茶、黒の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
29	"	"	7.3	6.3	1.4	浅黄橙	浅黄橙	白、灰、茶の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部中央部に粘土のため
30	"	"	8.0	6.2	1.6	浅黄橙	浅黄橙	白、黒、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
31	"	"	8.2	6.5	1.75	浅黄橙	浅黄橙	0.2mm前後の砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
32	"	"	7.3	6.7	1.7	浅黄橙	浅黄橙	黒、灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
33	"	"	-8.5	7.0	1.4	浅黄橙	浅黄橙	白、黒、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	焼きひずみあり
34	"	"	7.8	6.0	2.1	浅黄橙	浅黄橙	白、黒、褐色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
35	"	"	9.5	7.7	1.5	浅黄橙	浅黄橙	黒、灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	一部に焼きムラあり

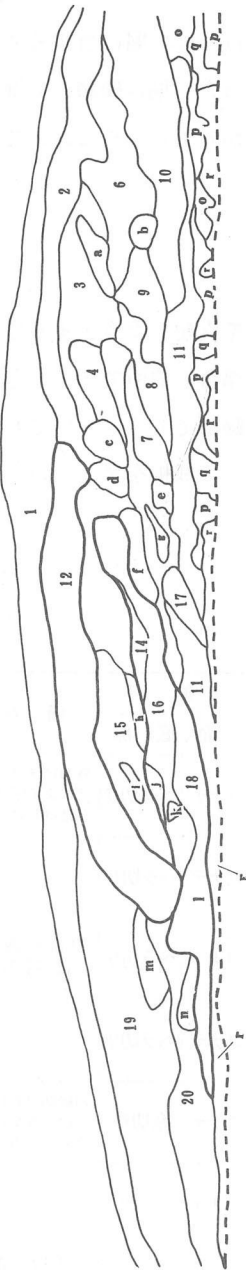


第24図 第1曲輪出土遺物実測図(縮尺1/3)



第25図 第2曲輪遺構配置図（縮尺1／100）

Level
37.300 m



1. 褐色、7.5 YR 8、粘性は少ない。パミスをわずかに含む。
2. 暗褐色、7.5 YR 8、パミスをおおむね含む。
3. 暗褐色、パサついている感じ、小礫は含まない。
4. 暗褐色、パミスをわずかに含む。
5. 径1~3cm程度の小礫をまばらに含む。3より粘性強くしまっている。
6. 褐色、7.5 YR 8、パミス、小礫とも含まない。
7. 褐色、7.5 YR 8、粘性弱い。径10cm程度の礫が数個混入、その他、パミスをわずかに含む。
8. 暗褐色、7.5 YR 8、より粘性つよく、やわらかい。指でかく押しつぶす。
9. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
10. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
11. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
12. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
13. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
14. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
15. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
16. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
17. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
18. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
19. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。
20. 暗褐色、7.5 YR 8、粘性は強い。指でかく押しつぶす。

- a. 褐色、10 YR 8、土質は多少ほぼ同程度だが、わずかにしまりがよい。
- b. 5cm前後の小礫が数個存在している。
- c. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- d. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- e. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- f. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- g. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- h. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- i. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- j. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- k. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- l. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- m. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- n. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- o. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- p. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- q. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。
- r. 暗褐色、7.5 YR 8、径2~3cmの小礫を含む。粘性は強いが固く締まった感じ。パミスをわずかに含む。

第26図 第9トレンチ東壁土層断面図 (縮尺1/40)

(4) その他の遺構

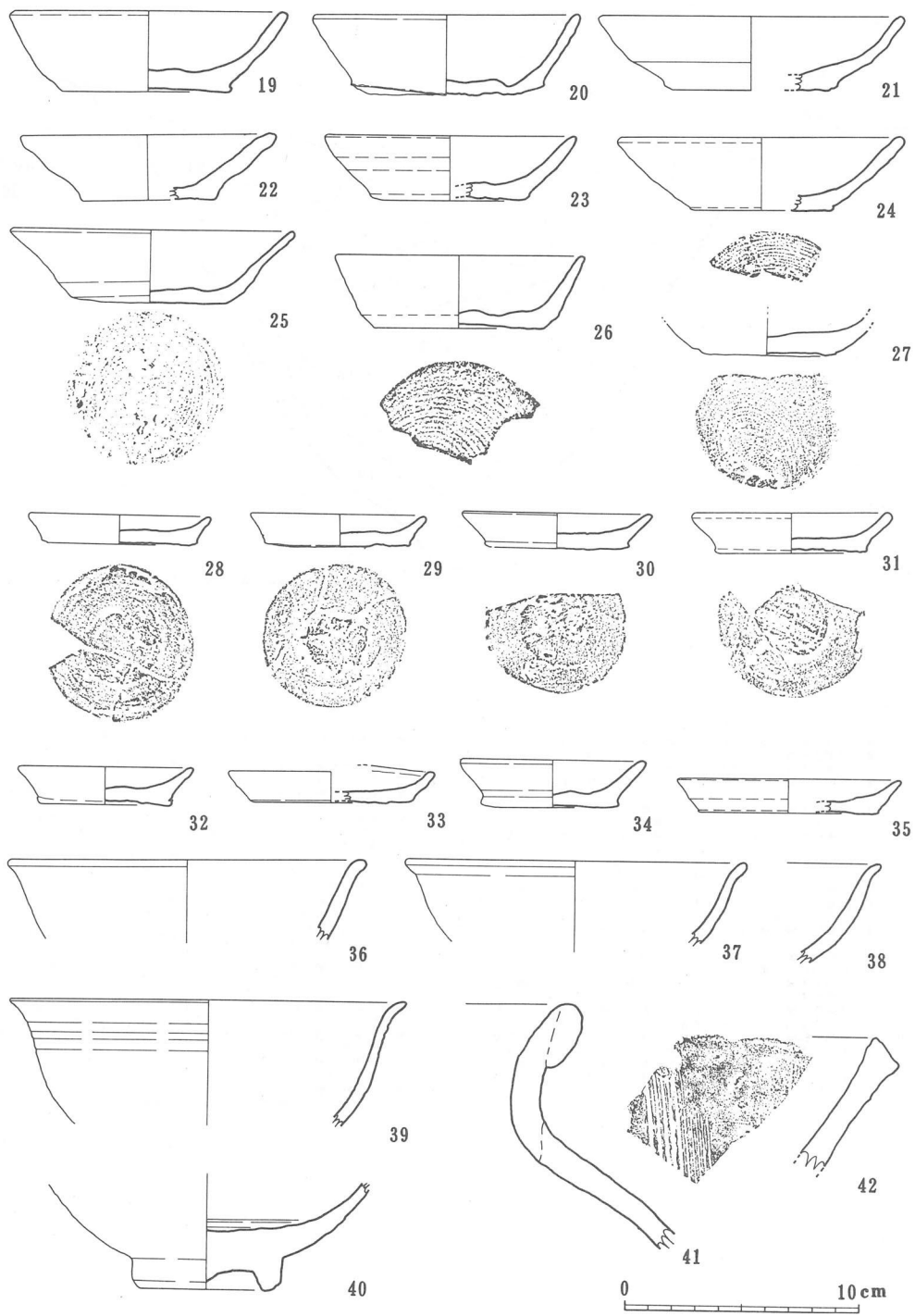
第2曲輪と第3曲輪の間に第6トレンチを設定し堀の土層観察を行った。堀は当初考えていたものよりかなり深くなり、第2曲輪の平坦面から約2.4mとなった。堀は礫層まで掘られ、断面形もV字形をなす(第28図)。他の箇所を設定したいくつかのトレンチにおいても同様なことが認められた。

Ⅲ、ま と め

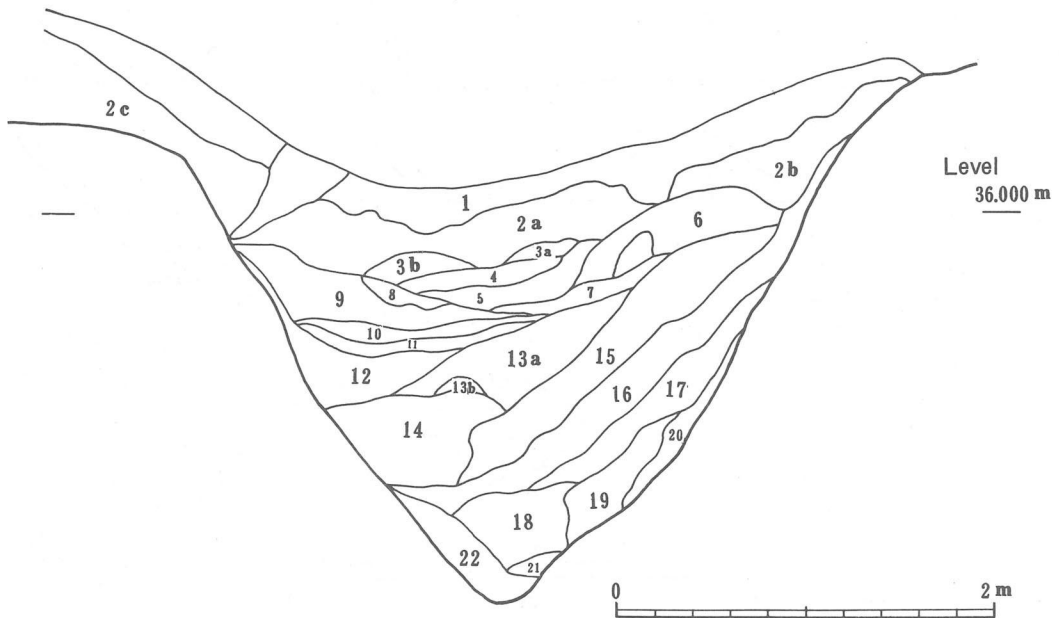
日向記など古い文献でもみられるように、この熊野の地は山東を支配しようとする島津氏、それに対し飢肥を得んとする伊東氏それぞれ進出しようとする場合の要所であったと思われる。幾度となく島津氏あるいは伊東氏の支配が繰り返され、記録にでてくるだけでも3回の入れ変わりがあったようで、両氏がまみえていわゆる「解放区」の様相を呈していたと考えられる。

表10 土師器観察表(2)

番号	出土位置	器形	法量(cm)			色調		胎土	焼成	調整			備考
			口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
1	第1曲輪	坏	13.3	9.2	3.3	浅黄橙	浅黄橙	白・うす茶の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	外面はヨコナデによる凹凸がはげしい
2	"	"	10.5	6.8	3.7	浅黄橙	浅黄橙	白・うす茶灰の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
3	"	"	-	7.5	-	浅黄橙	浅黄橙	灰・うす茶の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	底部に板目が残る
4	"	"	12.6	8.5	3.6	浅黄橙	浅黄橙	細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
5	"	"	-	7.2	-	淡橙	淡橙	うす茶・白・白く光る細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	口縁部付近に一部ススが附着している
6	"	皿	7.4	6.1	1.4	浅黄橙	浅黄橙	灰・茶の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	
7	"	"	7.5	6.2	1.6	橙	橙	細砂粒を少量含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	内外面に一部ススが附着している
8	"	"	7.2	6.2	1.5	にぶい橙	にぶい橙	0.5mm前後の砂粒を含む	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	



第27図 第2曲輪出土遺物実測図（縮尺1/3）



- | | | | | | |
|-------|-------------------------|--|--------|--------------------|--|
| 1 層 | 褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 攪乱層である。乾燥がはげしい。 | 12 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | ややもろい小礫を含む。粘性が強くかたくなった層である。 |
| 2 a 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | こぶし大の礫1~2コ、及び小礫を極少量含む。比較的かたい層である。 | 13 a 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 小礫混り。橙色のパミス粒状にまばらに含む。粘性が強くかたい層である。 |
| 2 b 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 2 a 層と同様であるが、一部攪乱穴が入りこんでいてやわらかい部分がある。 | 13 b 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 13 a 層と同様であるが、13 a 層程は橙色のパミスが見られない。 |
| 2 c 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 小礫混り。弱い粘性があり、かたくなっている。土器小片を少量含む。 | 14 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 小礫~大礫を多く含む礫層である。比較的大きめの石は南側に集まり、傾斜して残りの部分に小礫が集中している。粘性あり。 |
| 3 a 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 層全体の粒子が荒く、黄褐色のパミスを少量含んでいる。かたい層である。 | 15 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 小礫~中礫混り。橙色のパミスが13 a 層よりも細かくはいる。また、粘性も13 a 層より弱い。炭を少量含んでいる。 |
| 3 b 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 層の性質、状態は2 a 層と同様であるが2 a 層よりやや粘性がある。 | 16 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 小礫混り。橙色のパミスを粒状に含むが15層程ではない。粘性のある比較的やわらかな層である。炭少量を含む。 |
| 4 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 弱い粘性のあるかたい層である。 | 17 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 小礫混り。16層より色調が明るい。同様にパミスを含む。湿り気をおびた強い粘性の層である。 |
| 5 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 粘性が4層に比べて増し、色もやや明るく褐色味をおびてくる。かたい層である。 | 18 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 小礫が多く含まれ、礫層とも言えるが、土の方がやや優越している。粘性がありかたくなっている。 |
| 6 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 小礫を少量含む。粘性がありかたい層である。 | 19 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 褐色の粘質土を一部に少量含む。粘性がありかたくなった層である。パミスも少量含む。 |
| 7 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 5層より色調がやや暗い。下部に黄色の砂を少量含む。 | 20 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | パミスを極少量含む。かたくて粘性がある。 |
| 8 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 3 b 層よりやや暗い色調である。粘性があつて、やわらかい部分とかたい部分がある。 | 21 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | パミス、炭を少量含む。粘性が非常に高く、湿り気もつよい層である。 |
| 9 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 砂質土が極少量まじりやや粒子があらくなる。そのため表面的には粘性がよわまる。 | 22 層 | 暗褐色土層 (Hue10Y R ㄟ) | 中~大礫の間に粘性のある比較的やわらかい暗褐色土が入りこんだ礫層である。湿り気もつよい。 |
| 10 層 | 暗褐色砂層 (Hue10Y R ㄟ) | 上部では9層土とまじり暗褐色を呈するが、下部では黄色の色がよくなる。弱い粘性がある。 | | | |
| 11 層 | オリブ褐色砂層 (Hue 2.5 Y R ㄟ) | 黄色の砂と暗褐色の砂質土とがマゼンタ状にはないが、全体的には黄色の砂の方が強い。弱い粘性がある。 | | | |

第28図 第6トレンチ南壁土層断面図 (縮尺 1/40)

出土遺物は、土師器の 坏・皿が主体でそのほとんどはヘラ切り底のものであり糸切り底は少ない。土師器は編年がまだ県内では確立されておらず時期は不明だが、坏・皿の形態が前原西遺跡出土のものに類似することなどから14～15世紀のものと考えられよう。陶磁器類では備前焼、青磁、白磁が少量みられる程度であった。備前焼では、甕の口縁部の玉縁が下方にさほど垂れてきておらず、播鉢は口縁上面を外下り気味に面取りしている点などから第Ⅲ期の後半（南北朝～室町時代初頭）に位置付けできよう。青磁はその形態あるいは施釉の状態から15～16世紀代のものと考えられる。概略ではあるが、遺物では15～16世紀前半までのものが主でそれ以後の遺物はほとんど出土していない。

城の防御施設としては、曲輪の周囲に深さ2 m程度の堀が巡らされている点や土塁が非常に大きいこと、そして土塁上の柵あるいは板塀の存在などからかなり堅固なものであったと想定される。城の北側が非常に堅固であり主郭が南端に位置することなどから当山城は北向きの城と考えられよう。

また伊東氏の記録である「日向記」にも車坂城の記載はみられるのに対し、当山城についての記載がまったくみられないことなどから、山東へ勢力を拡げようとする島津氏の拠点として考えられる。そして、当山城は伊東氏の四十八城の一つにもなった清武城に対するものとして築かれたといえる。そうすると、遺物の示す年代と伊東義祐が飢肥を支配する時期、天文十年（1541）とある程度一致することから、伊東氏の飢肥進出に伴って、島津氏の城である今江城は廃城されたと考えられる。丘陵頂部にある深さ約2 mの堀がすべて埋没していることなどはこれを示す例かもしれない。また、伊東氏没落後、島津氏が日向を治めるが、その折、宮崎城に入った上井覚兼の日記にも「海江田」（加江田）の記載はみられるが当山城に関する記載はないことからすでにこの時期（16世紀後半）には廃城になっていたと考えられる。

当山城の文献上での記録の探索は今後の課題となるが、島津氏の有力な家臣であった山田聖栄の記録において「……是も元久御代山東加江田倉そこノ城責落之時合戦、新納殿内隈江方討死……」とあり、「倉そこノ城」を当山城に比定できるかもしれない。

（谷口武範）

註

- (1) 『建久凶田帳』日向郷土史料集刊行会 1963
- (2) 「前原西遺跡」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』（Ⅱ）宮崎県教育委員会 1981。

- (3) 「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告第2集』宮崎県教育委員会 1985
- (4) 『山内石塔群』宮崎県教育委員会 1984
- (5) 「城内遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3) 宮崎県教育委員会 1979
- (6) 「都城・中之城跡」『都城市文化財調査報告書第3集』 都城市教育委員会 1983
- (7) (4)と同じ
- (8) (2)と同じ
- (9) 間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集』(3) 小学館 1977
- (10) 『上井覚兼日記』 東京大学史料編纂所 1954
- (11) 山田聖栄は応永五年(1393)に生まれ90年近く生存している。この山田聖栄自記は彼が85才の時(文明十四年)の年に数巻の書になったという。
『山田聖栄自記』 鹿児島県 1967

参考文献

- 「日向記」『日向郷土史料集』第1巻所収 日向郷土史料刊行会 1951
- 平部嶺南『日向地誌』日向地誌刊行会 1929
- 喜田貞吉・日高重孝『日向国誌』 史誌出版社 1930
- 日高次吉『宮崎県の歴史』 山川出版社 1970

圖 版



今江城跡 (仮称) ・前原北遺跡

図版 2



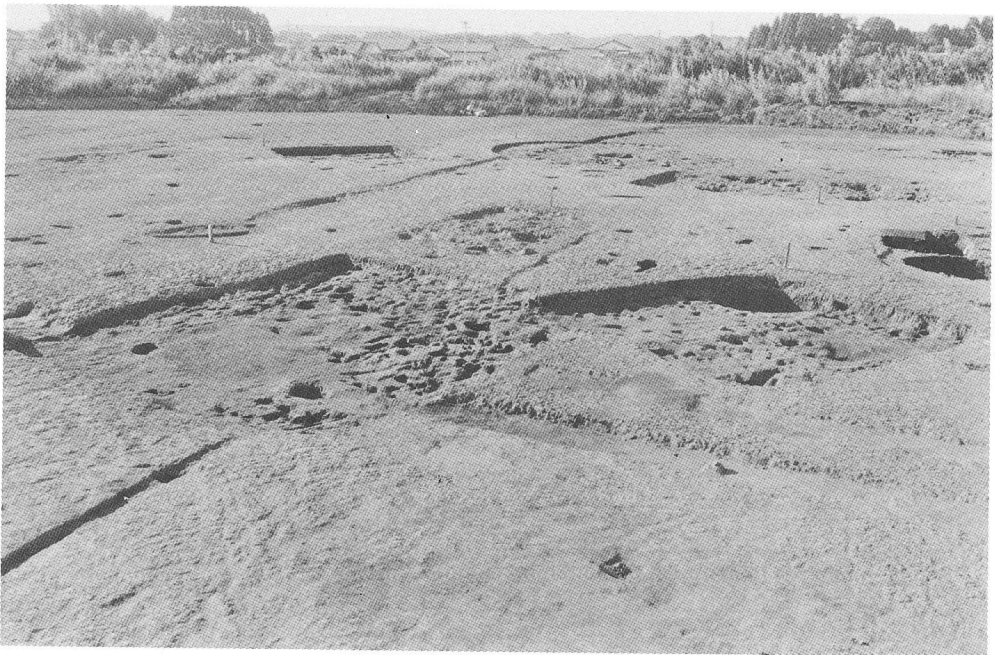
S A 5・6 検出状況 (北西から)



S A 50 検出状況 (西から)

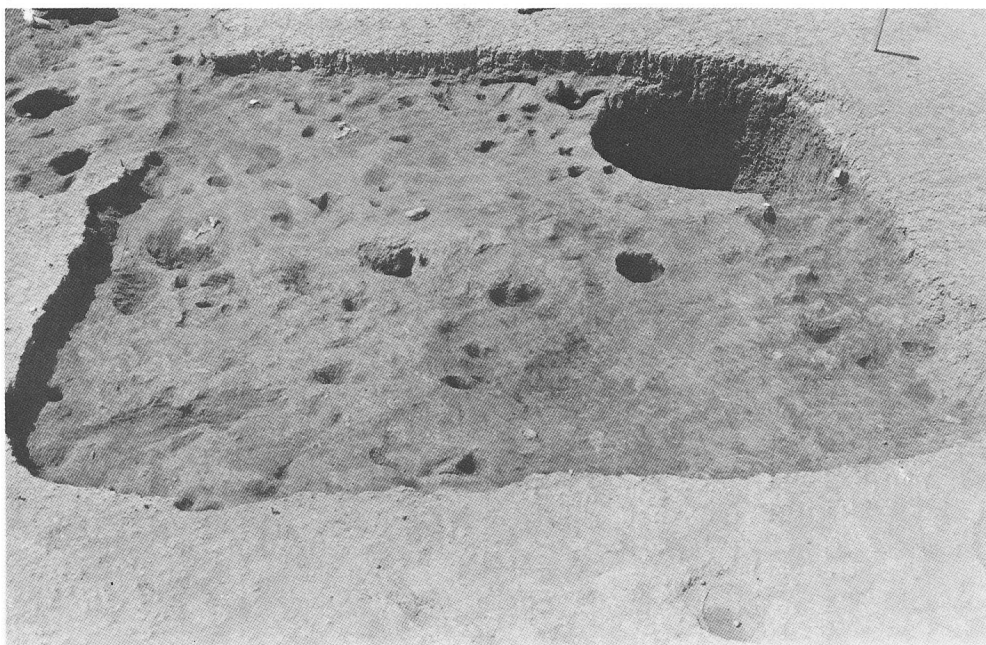


東端区の状態（西から）



S A 10・S A 10-1 検出状況（南東から）

図版 4



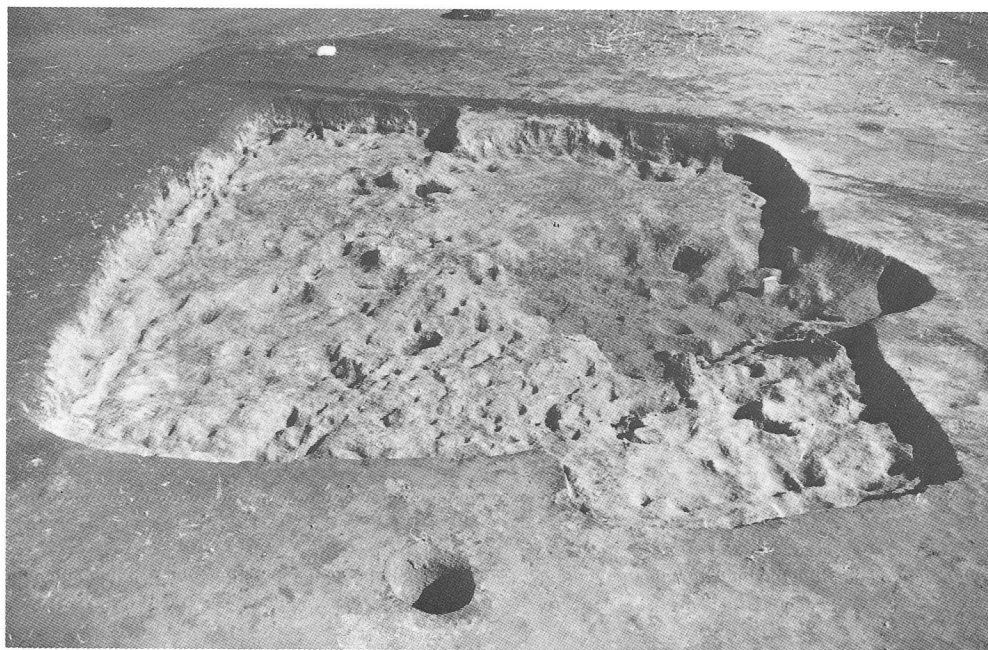
S A 10検出状況（東から）



S A 22検出状況（北から）



SA 4・SA 4-1 検出状況 (東から)



S A 36検出状況

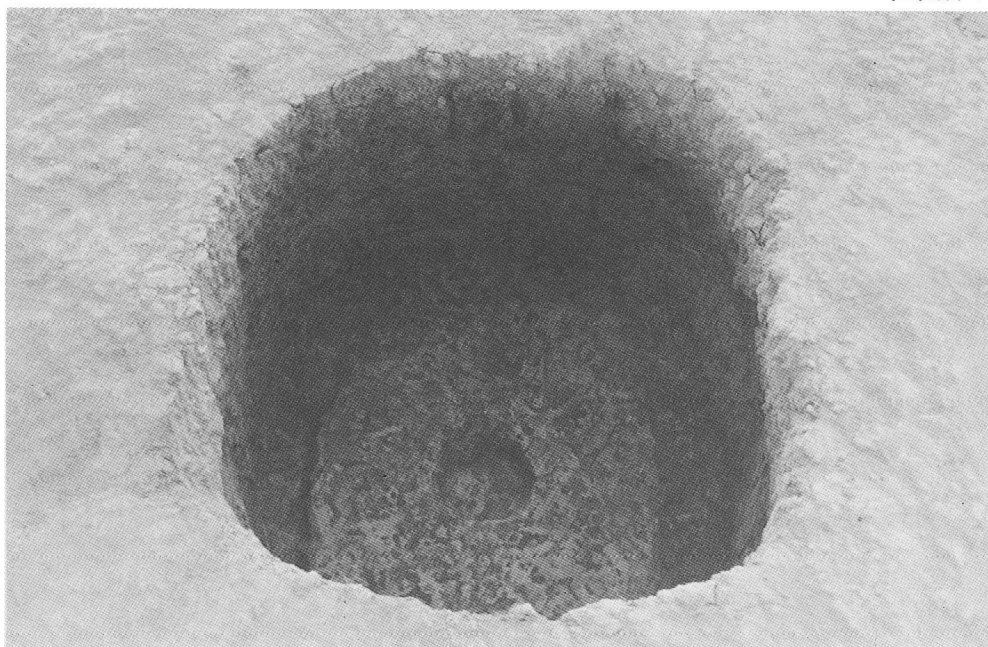
図版 6



S A 49遺物出土状況



S A 49高杯出土状態

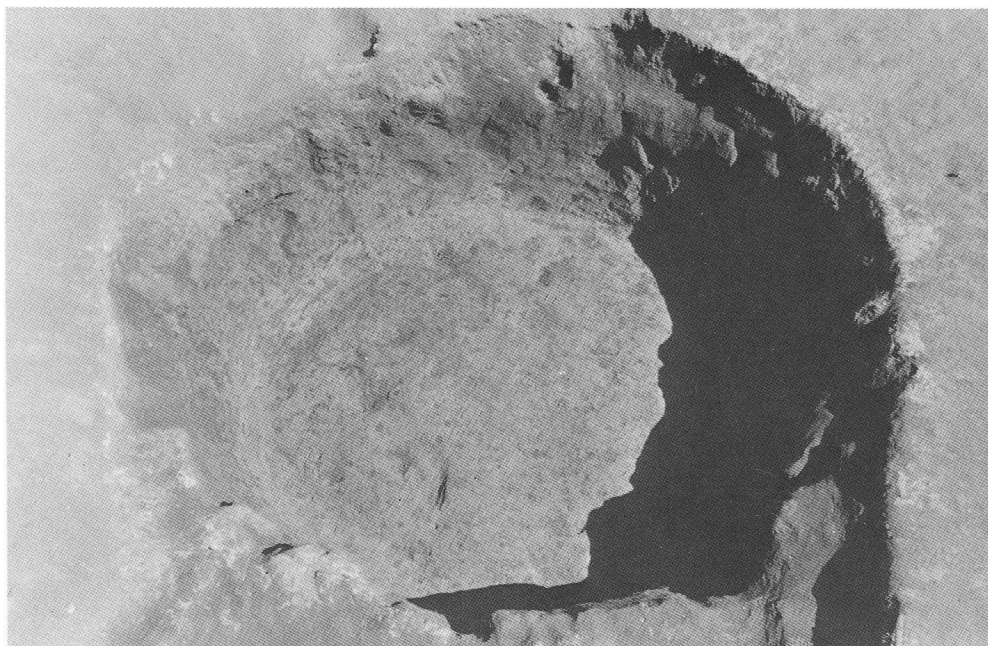


S C 12 検出状況



S C 16 検出状況

図版 8



S C 13 検出状況



S C 13 遺物出土状態



S A 30 - S C 1 遺物出土狀態

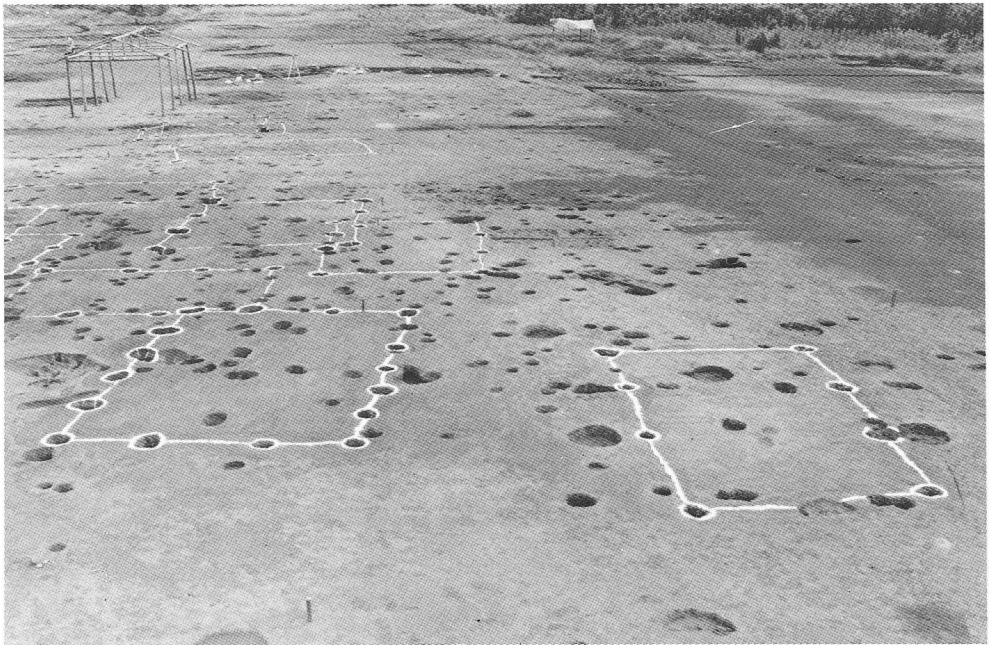


S A 30 - S C 1 貝殼出土狀態

図版10



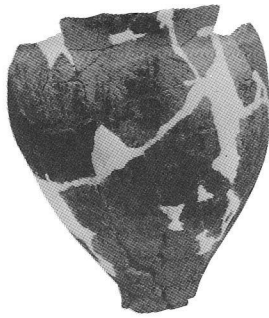
西区掘立柱建物跡検出状況(1)



西区掘立柱建物跡検出状況(2)



SA 5



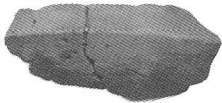
SA 5



SA 6



SA 6



SA 5



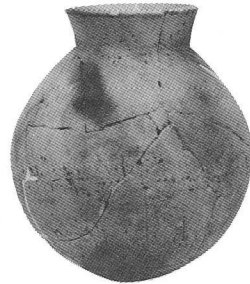
SA 10



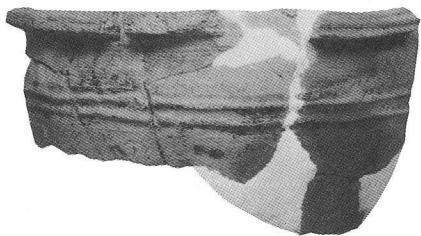
SA 10



SA 10

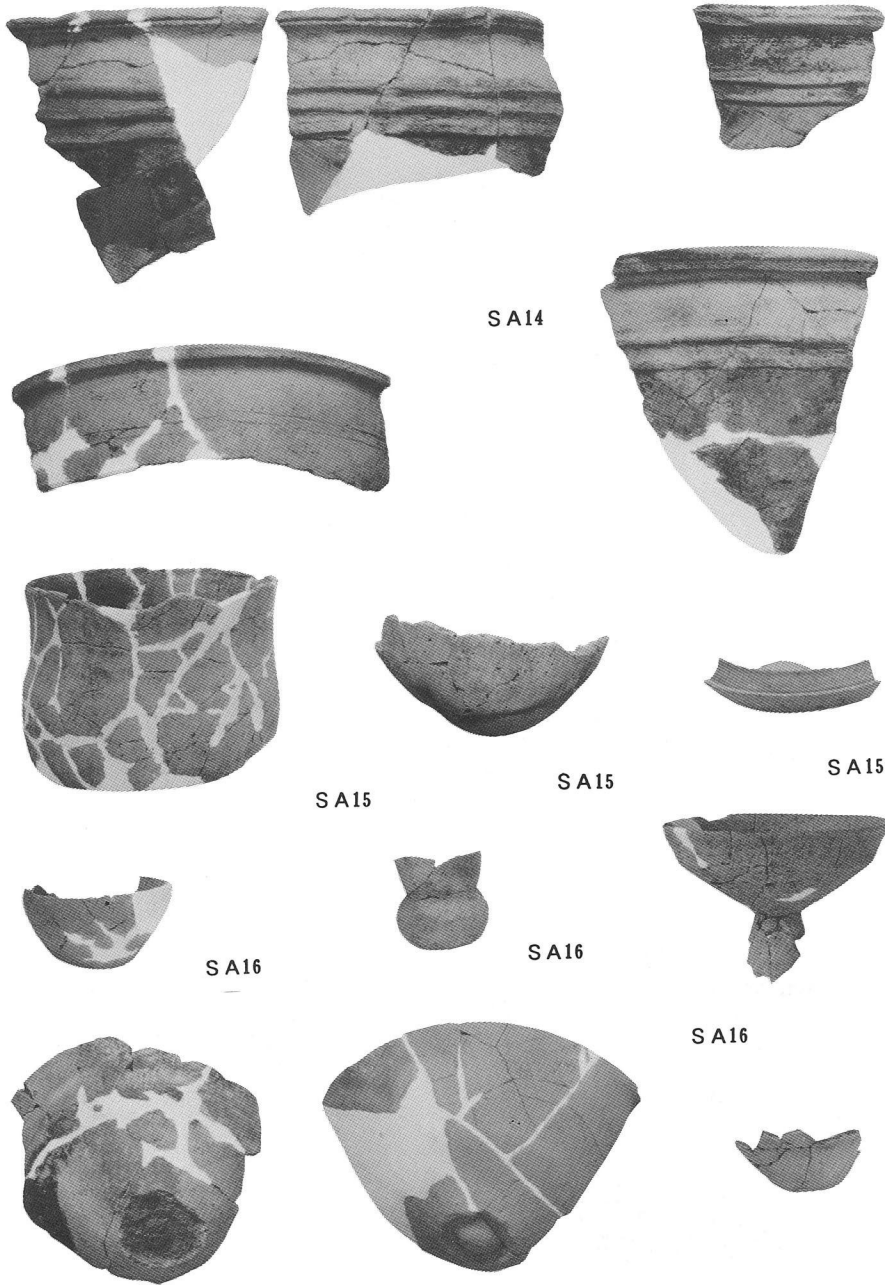


SA 10

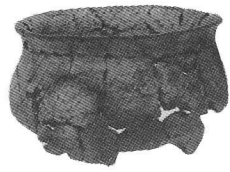


SA 14

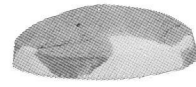
图版12



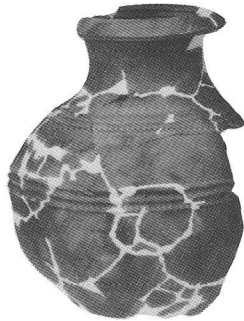
前原北遺跡出土遺物(2)



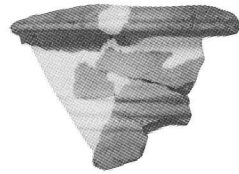
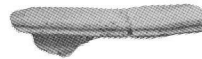
SA28



SA28



SA32



SA32



SA32



SA32



SC11



SC2



SC2



SC2



SC11



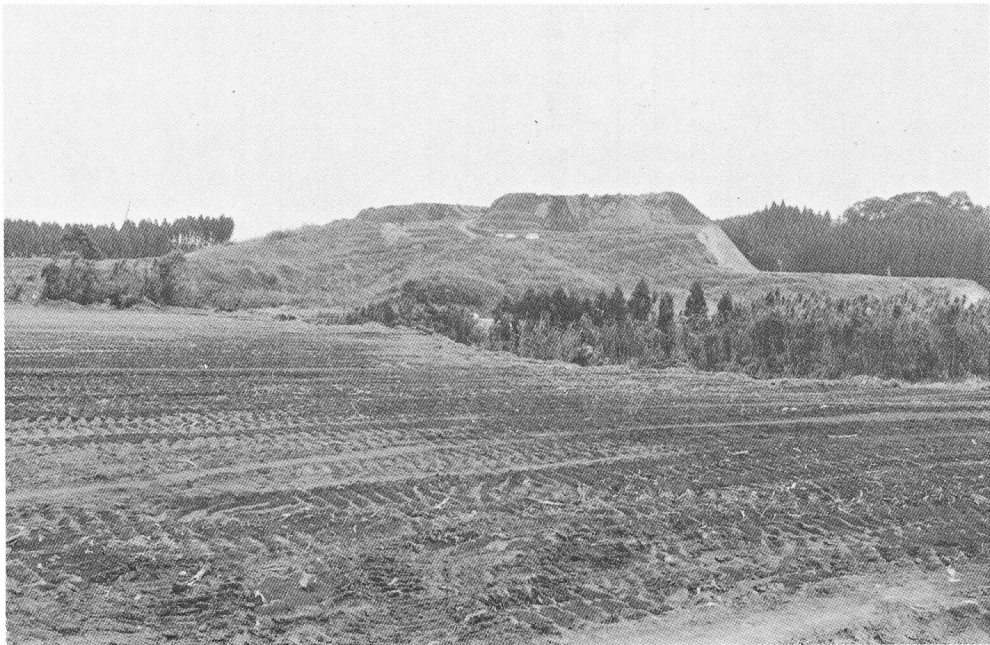
SC11



図版14



今江城（仮称）北から



今江城（仮称）遠景北西から



第1曲輪第3トレンチ東壁土層断面



井戸検出状況

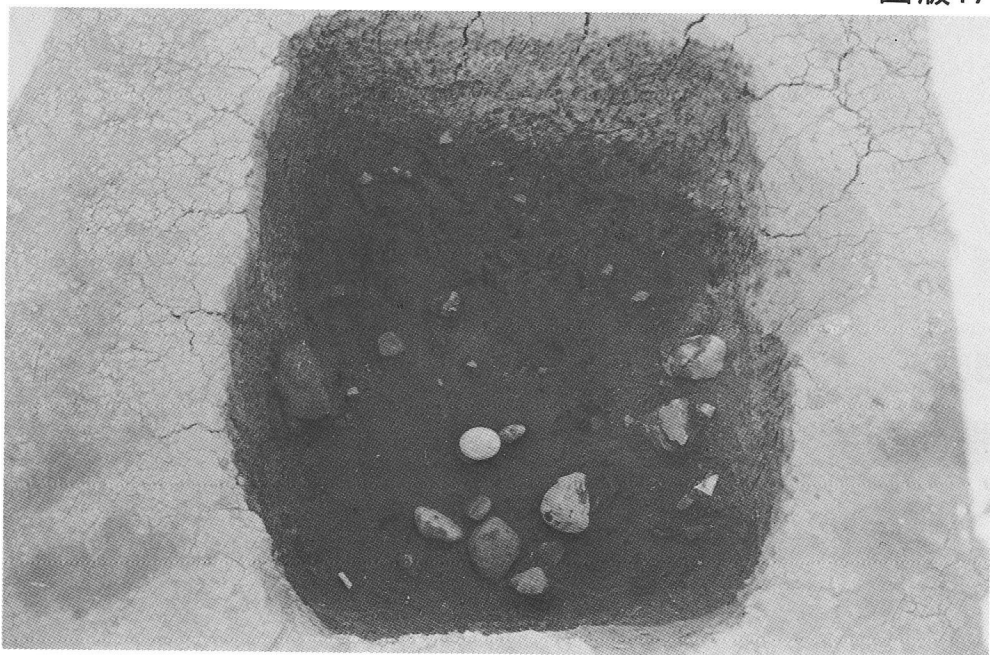
图版16



5号・6号土壙検出状況



7号土壙検出状況



9号土壌検出状況



9号土壌遺物出土状況